中村柾子さん講演会

「絵本はともだち」

講演記録

主催；「ゆめのたね」（西川図書館読み聞かせボランティアグループ）
　　「まつぼっくりの会」（西川図書館読み聞かせボランティアグループ）
共催；西蒲区社会福祉協議会，西蒲区ボランティアセンター
　　新潟市教育委員会（新潟市立西川図書館）
日時；平成 24 年３月 10 日（土）午後１時 30 分から３時 30 分
会場；新潟市西川健康センター

中村柾子さん講演会「絵本はともだち」講演記録　目次

主催者あいさつ
中村柾子さんの紹介
開会のあいさつ「ゆめのたね」代表　高木章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
（講演会）
はじめに・・ 3
現代は、子どもが子どもらしく過ごしにくい時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
なぜ、読むことがいいのでしょう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
絵本を読むことで、子どもたちが得るたくさんの宝物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
①言葉の力・言葉の魅力・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
②絵を読む楽しさ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
③自然を楽しみ見つめることや、身の回りのものへの関心のたかまり・・・・・・・・・13
④童話につながる物語の面白さ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
⑤大人と子どものつながりの深さ・確かさ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
子どもたちが楽しんで読んでいる絵本のいくつか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
赤ちゃんなら～　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
ちょっと大きくなった子どもたちの興味・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
鍛えられていく目や言葉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
喜ぶことがいいとは限らない子どもの本・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
絵本（童話）を選ぶために、私たちにできることは？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

ボランティアと子どもの読書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
＜保育者や、教師が日々の暮らしの中で絵本を読んだり、童話を読むということ＞・・・30
＜でも、保育の場もいろいろです＞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
＜選書について＞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
＜実際の読み方は＞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
小学生にも絵本を！昔話を！・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
閉会のあいさつ「まつぼっくりの会」代表　児玉イツ子・・・・・・・・・・・・・・・・・35
西川図書館館長のあいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

懇談会・・・37
講演会レジュメ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
中村柾子先生が講座のために用意された絵本のリスト・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
中村柾子さん講演会「絵本はともだち」案内・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
西蒲区の図書館が目指す５つの指針・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
あとがき

主催者あいさつ

中村柾子先生をお迎えして

　このたび、社会福祉協議会、西川図書館、西川図書館読み聞かせボランティアグループ「ゆめのたね」の皆さんのお力添えで、中村柾子先生をお迎えすることができ、私達「まつぼっくりの会」も嬉しさのあまり、スタッフから思わず「バンザーイ」の声が上がりました。

　いつも思うことですが、あの人に会いたい、この人に会いたいと思っても、そうそう簡単に会えるものではありません。だから、人は、その人の本を読みます。そして、その人の世界に入り込み、その人の人間性に触れ、楽しんだり、満たされたり、憧れたり、本を読み返したり、その人の書物を追いかけたり…そうするのが精一杯です。時には、憧れの人の講演会が催されると、遠くても会いたい一心で足を運ぶことも少なくありません。

　このたび、縁あって中村柾子先生にお会いできる機会が与えられ、さっそく先生が出版されている本をスタッフで読み合い、皆で楽しく準備をすることができました。参加人数は予定をはるかに上回り、120 人ほどでした。何とも嬉しく、感謝の気持ちでいっぱいでした。会いたい人に会える、ここに大きな意味があるように思います。講演会では、先生の温かい人柄が会場いっぱいに広がり、まるで真綿に包まれたようなものを、肌に感じました。絵本に対する深い深い愛情のかけ方や、それを子どもたちがまるごと心と肌で受け取っている姿が目に浮かんでくるようでした。自然体の中で話されている先生。笑いもあり、実に楽しく、心地よく、心の中が満たされるものでいっぱいでした。絵本の世界、物語の世界へと子どもたちが読み手と一緒に楽しく旅しているような、何とも言えない幸せを感じる時間でした。参加者の皆さまは、どんな心の宝物をもち帰られたことでしょう？　お帰りになる時の皆さまのあの表情、あのにこやかな笑顔で帰られた姿がとても印象的でした。

　最後になりましたが、中村先生ありがとうございました。先生にお会いしご一緒できた何時間かは、本当に幸せなひと時でした。そして参加者の皆さま、ありがとうございました。スタッフの皆さん、関係者の皆さま、ご苦労様でした。

２０１２年３月３１日

西川図書館読み聞かせボランティアグループ

「まつぼっくりの会」　代表　　児玉　イツ子

主催者あいさつ

平成 24 年３月 10 日、私たちの夢の一こまが実現しました。
中村柾子先生を西川にお呼びし、そのお話を私たち西川図書館の読み聞かせボランティアのみんなでお聞きすることができたのです。きっかけは、昨年の夏ごろでしたが、社会福祉協議会の助成金を地域のボランティア団体の活動資金としていただけるかもしれないというところから始まりました。
しかし、申請の基準や金額の枠があり、申請したとしても必ずもらえるわけではないことがだんだんわかってきました。

私たちは西川図書館をホームグランドにしながら、学校、幼稚園・保育園、学童保育など地域に出かけて行って、子どもたちに読み聞かせをしているグループです。図書館の入門講座を受けて始めたわけですが、いつもよい絵本とは何かとか、子どもにあった本選びとはどういうことなのかで悩んでいました。悩んでもなかなか良い知恵が浮かんできません。絵本を読んだときの子どもたちの嬉しそうな顔に会いたくて日々悩み、練習を重ねている状態でした。

助成金をもらおう。そして全国的に活躍されている立派な先生をお呼びして私たちのための勉強会を自分たちで開こうと思い立ったら、もう止められませんでした。図書館に相談し、社会福祉協議会にも相談し、いろいろ大変なこともありましたが、何とか自分たちの講演会を実現することができました。
当日は、みんな舞い上がってしまいましたが、とにかく先生のお話に聞き惚れてしまい、うんうんと頷きつつ、２ 時間はあっという間に過ぎました。おいでいただいた中村先生、本当にありがとうございました。私たちの日ごろの疑問もずいぶんと氷解した気がします。次の活動へのエネルギーが蓄積されたような講演会でした。

中村先生のご講演を西川図書館が記録としてまとめてくれました。本当にうれしいことです。これは私たちボランティアの記念になるものです。
これからも、私たちボランティアグループは西川図書館と一緒になって、地域の子どもたちの心の成長のために読み聞かせ活動を続けていきたいと思っています。そしてそれが自分たち自身の成長にもつながることを願って、あいさつとさせていただきます。

2012 年３月 31 日
西川図書館読み聞かせボランティアグループ
「ゆ め の た ね」　代表　高木　　章

○　中村柾子さんの紹介

講師　中村（なかむら）　柾子（まさこ）さん（青山学院女子短期大学講師）

講師プロフィール

東京生まれ，青山学院女子短期大学児童教育科卒業。十年間にわたって幼稚園に勤務後，保育士として保育園で勤務。元・私立豊川保育園園長。
現在，青山学院女子短期大学講師，立教女学院短期大学非常勤講師
著書に『絵本はともだち』『絵本の本』（福音館書店）他 多数

中村柾子さん講演会「絵本はともだち」の様子

開会のあいさつ

「ゆめのたね」代表　高木　章

皆様、こんにちは。ようこそおいでくださいました。本日はいろいろな準備をしまして、ようやく実現することになりました。中村柾子先生のご講演の日がついにまいりました。私ども、本当に心から喜んでおります。そして、今日お出でいただきましたたくさんの皆様を目の前にして私たち本当に嬉しく思っております。約束は 1 時半からということですが、これから始めさせていただきたいと思うのですが、私、今回主催者ということでご挨拶をさせていただきます。「ゆめのたね」代表の高木章と申します。どうぞ、よろしくお願いいたします。

これから、中村柾子先生に「絵本はともだち」の演題でご講演をいただくわけですが、まず、先生が大変お忙しいところ私どものために、このような所までお出でいただいたこと、心から感謝申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。そして、今回共催をしていただきました新潟市立西川図書館の館長さんはじめ職員の皆様、とても協

力的で感謝申し上げます。また今回、地域のボランティア活動に対し助成金を支給していただくことになりました西蒲区社会福祉協議会、西蒲区ボランティアセンターの職員の方々からも大変なご協力いただきました。本当にありがとうございます。深くお礼を申し上げます。

先生のプロフィールですが、皆さま方のチラシに書いてありますが、ご紹介させていただきます。先生は、東京生まれということでございまして、青山学院女子短期大学児童教育科卒業。10 年間にわたって幼稚園に勤務をされたあと保育士として保育園に勤務。元、私立豊川保育園園長。現在は、青山学院女子短期大学講師、そして立教女学院短期大学の非常勤講師ということでございます。そして、お書きになった本はここにもありますが『絵本はともだち』という非常に素晴らしい内容の本です。それからもう一冊ご紹介しますとこちらの『絵本の本』ですが、その他多数のご執筆がございます。

ところで、先生は『絵本の本』の序のところで、こんなふうに述べておられるのですね。「みなさんは、どうして保育の場に絵本があるのか考えてみたことがありますか？もしもそこに絵本がなかったら、たちまちのうちに保育は成り立たなくなってしまうものなのでしょうか？きっとそんなことはないはずです。」ここは非常にいいポイントだと思うのですね。「自然環境が豊かだったり、そこに優しく遊び上手な先生がいたりすれば、絵本がなくても、十分に保育は成り立つと思うのです。」と、こうおっしゃっているのですね。

では、保育に絵本は必要の無いものでしょうか。そう思ってしまう前に少し考えてみましょう。絵本が当たり前にある暮らしが子どもたちに何をもたらすのか。絵本がそこにあるということで、子どもたちの中に何が起こるのか。そうなのですね、そこが知りたいということで、私も常に思っているところなのですが、是非先生に教えていただきたいと思っています。そんなことで今日お集まりの皆さんも恐らく、それぞれこんなことを先生にお聞きしたい、こんなことを話してくださるかなという期待で、胸を膨らませてお出でいただいたと思うのですね。その辺先生は、きっと上手に語ってくださるのではないかなという予感がしています。非常に楽しみにしております。

それでは、最後お願いですが、今日は先生から目一杯お話をしていただこうと思っておりまして、講演会は時間ぎりぎりまでお願いをさせていただいており、質問の時間は設けておりませんのであしからずご了承願います。では、早速先生からご講演をいただきたいと思います。中村先生、よろしくお願いいたします。

中村柾子さん講演会「絵本はともだち」

はじめに

こんにちは。ご紹介いただきました中村と申します。お昼近くにこちらに着きまして、「まつぼっくりの会」代表の児玉イツ子さんやほかの方々から、ずっとプレッシャーを受けっぱなしで、たくさん来るよとか、いろいろな子どもたちに本を手渡す様々な関係者がいるよとか言われて、もう穴があったら入りたいくらい、私がしてきたことは保育の場で本を読み合うことに尽きていまして、ただただ楽しんできただけなのです。

ですから、ここにお集まりの皆さん、本当にいろいろなお立場で家庭でだったり、ボランティアで学校や保育園に出向かれたりとか、もしかしたら保育者の方もいらっしゃるかも知れません。日常、今なさっている方たちのほうがずっと尊いわけで、私はしてきたことのいくつかを少し浮き彫りにして、何か皆さんのお役に立てることがあったら、もうそれだけで十分です。どうぞリラックスなさってください。眠い方は寝て、そして疲れたら退室して外の新鮮な空気を吸ってください。学びの場でも全然ありません。本を楽しんでいる仲間ですから、本のことを一緒に楽しみ合えたら、もうそれだけで十分だと思います。

私は、36 年間保育の場におりました。最初に受け持った子はもうそろそろ 50 歳になろうとしているのです。一番最初に受け持った子がなんと去年孫ができたと言われて、「ああ、私が４歳児で受け持った子がもう孫ができたんだ」と思ったのですけれども、その子が１年目に私が受け持って、何の本が好きだったか覚えているのですね。その子が大きくなって、そして自分が大好きだった本を子どものために取っておきたいといったものが、今度孫のために今取ってあるというのを聞きますと、本というものの命って長いなって思うのです。

私は保育者でしたから、保育の場で大事にしていたことはたくさんあるのですけれども、私が保育者になって一番難しく、一番面白いと思ったのが言葉についてだったのです。最初は、幼稚園に勤めていまして、幼稚園の４歳児とか５歳児の子どもたちと日々を楽しんでいたのですけれども、10 年して保育園に移ったとき、１歳児のクラスを受け持ったのですね。カルチャーショックでした。本当にまだ言葉を生み出さない子どもたちだけど、話しかけられればその意味が分かるという子どもたちに向かって、私はどんな言葉を持てばいいのだろうと思いました。

それがもう 30 年以上前のことですけれども、初めて持った１歳児に向かって私と一緒に組んでいたベテランの保育者が実に上手い保育の大ベテランだったのですけれども、絵本の読み方もものすごく上手かったのですね。

今ほど良い赤ちゃん絵本、良質な赤ちゃん絵本と言われるものはありませんでした。本当に数少なく童心社のシリーズですとか、わ

ずかなものしか無かったのですけれども、その先生は巧みに幼児の本と言えるものの中から、「これは１歳でも分かるんだよ」と言って『おおきなかぶ』を読んだりするのですね。それがすごくぴたっと子どもに合っていて、ああ、子どもたちまだ話なんかできないのに、聞く耳というのはすごいものだなと思って、ひたすら感心して私はその年の１年間、子どもが喜んだ本、読んでもらったけどあまり振り向かなかった本をひたすらノートに取りました。１歳児の子どもにとって、分かる言葉というのは何なのだろうとか、夢中になって見た本は何なのだろうと、１冊のノートができました。

その翌年、また１歳児を受け持ったのですけど、そのノートが大変役に立って、私も今度は自分で１歳の子どもに語りかけたり、絵本を見たり、絵本だけではなくて短いお話をしてあげたりとかすることが少しできるようになっていきました。それから、毎年毎年１冊ずつのノートができていって、２歳の子どもたちの本とか、３歳が喜んだ本とか、大はずれだった本とか、そんなことを楽しんで、私は子どもたちと本を読み合うということが大好きになりました。

あと、本当に裸足で園庭を走り回るような野蛮な保育をしていたのですけれども、泥団子を作ったり、蝉をつかまえたりして子どもと遊んでいました。今日、「絵本はともだち」というタイトルで皆さんにお話をするのですけれども、保育現場とそれから家庭との違いからちょっと始めてみたいと思っています。

数年前に、筑摩書房から出ている水村美苗さんという作家なのですけれども、そのかたがお書きになった『日本語が亡びるとき―英語の世紀の中で』という本があるのですけれども、日本語の変遷史のようなことがずっと書かれていて、今、英語が本当に世界共通の言葉になっていて、明治期くらいの日本語が今や全然伝わらない、そんな日本語になってしまったという歴史が書かれている中に、突如として本当に最後のところに、こんな２行が書かれていて、私はそれにハッとなったのですね。

自分がやってきた保育って何だったのだろう。自分が良かれと思って選んできた絵本って何だったのだろうって、その２行で考えさせられたのです。その２行なのですけれども、こういうふうに書いてあったのですね。**「教育とは家庭が与えないものを与えることである。教育とはさらには市場が与えないものを与えることである」**と書いてあるのです。家と園、学校は違うわけですよね。当然、違うと思うのです。幼稚園も保育園も子どものための暮らしの場です。家庭も子どものための暮らしの場ですけれども、明らかに違う。それぞれに良さがあって、それぞれに限界があって、それぞれに制限があるものだと私は思うのですね。

例えばどんなことかと申しますと、私は今、学生さんたちと付き合っているわけですけれども、保育園とか幼稚園に学生が実習に出向きますね。そのときに家と違うと思うこと

をその２行を読んだときに学生に言ってみたのです。「園と家庭と何が違うと思うか、実習に行って考えてみて」と言ったのですね。いろいろ出ました。おもちゃも一つに出ました。もしかしたら、４歳とか５歳の子どもは家に帰ってきて、もうゲームをしているかもしれない。テレビを見っぱなしの子どももいるかもしれない。「そういうものが園にあった？」と聞くと「無かった」というのですね。

では、幼稚園や保育園は子どもたちに何を体験させたいと思って、そういうものを置かないのだろうか。家ではどうしてそういうことを楽しみ、喜びとして置いてあるのだろうということを一つのテーマとして出したのです。おもちゃで。で、「園にはどんなおもちゃがあったの？」と聞きますと「積み木とか粘土とか、あるいは泥んことか水道とか布切れ一枚とかだった」。「そういう遊びに共通するものは何？」と聞いたら、いっぱい出たのです。「作り替えることができる。工夫することができる。それからいろいろな形、友だちとも遊べる。一人でも遊べる」。遊びに創造力があれば子どもは物を作り変えていきますね。家庭ではごっこ遊びというのはそんなにたくさん子どもがいませんから、あまりしませんけど、園ではいろいろなごっこ遊びもするものなのですね。おもちゃ遊びに違いが出てきたのです。

では、食べ物はどうなのか？という考えも出てきたのですね。一生懸命園では子どもたちに旬の野菜とか、それから薄味だとかいろいろなことを工夫して料理をしています。家でだったら大好きなチョコレートや、ときにはインスタント食品を使うけれども、保育園では何でそこまで考えて給食というものを作るのだろうという話から、次は絵本になったのです。

では、絵本は？ということを言ったら、学生が「何か地味だった」という人がいたのです。「家に置いていないような…」、その表現がおかしいと思ったのです。何か地味だった。「じゃあ、あなたたち、幼い頃、家でどんな本を見ていたの？」キャラクターものが挙がりました。キティちゃんだとかディズニーだとか、それからもちろん『ぐりとぐら』とか、そういう名前も挙がったのですけど、あんまり園にはそういう本が無かった。なぜだろう？ということで、この２行を紹介したのですね。

「教育とは市場が与えないものを与えるところ。」やっぱりマーケット、売れると思うものをやっぱり買いたいという気持ちは消費者だから当然だと思うのですけど、放っておけば子どもはキャラクターの絵に目が向いて欲しがるのは当然だと思うのですね。では、学校もですけれども、幼稚園も保育園も、そういうものを敢えて買わないということはどういうことか。幼児期に何を体験させたいかということがあって、そういうことをしている。遊びも、あるいは衣服もそうかもしれませんし、経験させたい遊びもたくさん、おもちゃもみんなそんな配慮がしてあるということだと思います。

だから、家の良さと園、学校なりの公共の

場に置かれるものの良さというのをミックスして子どもは育っていくんだねということだったのですけど、学生は学びの場で、幼児教育とかを目的にしているから、そこをはっきりと区分けして考えることができるわけですけれども、家庭で子どもを育てていた親御さんが幼稚園や保育園に来れば、園がどういうことを大事に考えて保育の場で実践しているかということは多分お分かりにならない。それがあるときある場面で気が付くと、ハッとなることがたくさんあるわけですね。ああ、おもちゃって、こんなものなのねとか、絵本ってこんなものを置いてあるんだと思う。

そういうことがありますが、私たちは両者を比べてみて、どっちが良いとか悪いということは一概に言いませんが、今日はその中で、絵本というものを主に取り上げて、子どもの暮らしにどうして絵本があるのか、なぜ必要なのか、そして読むことによって子どもたちは何を生み出していき、大人との関係を深めていって、子ども間の遊びも豊かにして巣立っていくか考えてみたいと思います。巣立った子どもたちの卒園後はどうなのかということも皆さんに少しご紹介できたらいいなと思っています。その中に、選ぶということがどれだけ私たちの場で、私たちなりにですけれども、保育の現場で、大事にされてきたかということをお話したいと思います。

巣立っていった子どもたちのなかで、私が受け持ち赤ちゃんのときから見ていた子どもたちが、もう何人も保育者になって戻ってきているのですね。私のいる保育現場にも３つの法人に保育園があるのですけど、10 人くらい卒園児が保育者になって戻ってきているのです。なぜ戻ってくるのだろうと思うのですけれども、やっぱり幼いときにいっぱい遊んだ、それから本もいっぱい読んだということが楽しかった。だから自分は保育者になりたいと言って、学校に行って戻ってきてくれるようで、そのことを私は大変嬉しく思っています。

一人の卒園児と先週出会ったことから絵本について話したいと思うのですけど、私が３歳、４歳、５歳と３年間受け持った人が今、保育者になっているのですね。つい先週のことですが、その人が年長組を受け持っていまして、子どもたちと劇遊びをして父母の皆さんに見ていただいたのですけど、何の絵本をテーマにしたかと言いますと、『やまなしもぎ』という本をクラスの子どもたちに読んであげて、子どもたちもそれがいいといって劇遊びをしたのです。そのタイトルを聞いた途端、私はもう笑ってしまったのですけれども、なぜかというと、その人が年長さんだったときに『やまなしもぎ』をやりたいと言ったクラスメイトがいたわけですね。彼女たちは別のお話をやりたいと言って対立したのです。そして、『やまなしもぎ』はとうとう一人になってしまったのです。やりたいと言ったのだけど、他の反対派から「それはね、化け物が出てきて、その化け物をやりたい人がいないんじゃないの？」とか「見たお母さんが気持ち悪くなるんじゃない？」とか、いろいろ

その子を説き伏せるために反対意見を言ったのですね。彼はやむなく『やまなしもぎ』をひっこめたのです。「分かった、そっちでいい」と言って別のお話になったのですけど、そのことが頭にあるのかどうかは分からないのですけれども、彼女が『やまなしもぎ』を選んで、自分のクラスの子どもたちと演じることを楽しんだというのを聞いて、「ああ 20 数年経ってこんなことがあるなんておもしろい」と思いました。

その彼女は、もう 20 数歳なのですが、昔劇を決めるとき一人の子どもが「『やまなしもぎ』じゃなくていい」と最後に泣き出したのですね。そのときに彼女が言った言葉があるのです。「かわいそうだね」と。最後に消されてしまったので「かわいそうだね、先生、この子一人のために読んでやりな、もう一回」って言ったのですね。それでその子も「分かったよ」と言って、「これじゃなくなってかわいそうだったね、でもみんなこっちになっちゃったんだね」といってあげてから一番前にして読んだのです。きっと、そういうことが記憶にあったのではないかなと思って、私はとても感慨深く思ったわけです。

３歳、４歳、５歳児の頃の記憶って大人になるにつれてどんどん消えていきますけれども、今のような４、５歳頃の楽しかったという体験、不思議だなと思ったこと、それから、ああ、あの本は忘れられないと思ったことなどは、かなり色濃く印象に残るものなのだなと私は思っています。それくらい本というものは、子どもにとってやっぱり大事なんだなと思いました。

現代は、子どもが子どもらしく過ごしにくい時代

プリントの方にいってみたいと思います。３枚ありますが１枚目はタイトルには「絵本はともだち」、２枚目は「ボランティアと子どもの読書」、ボランティアをなさっている方たちのために少し思い付いたことも書きました。３枚目が「小学生にも絵本を！昔話を！」とあります。最初の「絵本はともだち」の方を見ていただきたいと思います。最初のところに、「現代は、子どもが子どもらしく過ごしにくい時代」だと書きました。40 何年か前に、私が保育者になったときの社会の背景、時代。全然違います。子どもたちはもうテレビは見ていましたけれども、テレビゲームはありませんでした。子どもたちに今、なぞなぞをやろうと言って、なぞなぞをいろいろ考えていたら、ある子はパソコンで調べてきました。「なぞなぞ」とお母さんが検索してくれたらいっぱい出てきた、印刷してきましたと。私が保育者の最後くらいのときですけど、なぞなぞの本を見るとか、図書館から借りてくるじゃなくて、もうインターネットで検索することを子どもがしているんだなと思う時代だったのですね。もう百科事典もない時代ですから当然だと思うのですけれども、やっぱり子どもながらにそういう時代の中で暮らしていますし、おもちゃも違って

いるし、外遊びも誘い出さないと出て行かない子どもたちが増えてきています。家の中に閉じこもっていて、いろいろなおもちゃで遊んでもらっているという感じがする子どもたちも多いと思います。

それから、絵本も昔は絵本というものでしたけど、今はＣＤ化されていたりＤＶＤになっていて絵が動いたり、音声が伴ったりしますので、読もうとすると「それ見た」と。『はらぺこあおむし』なんか動く絵で見ているのですね。ですから、「え、動かないの？」とか言う子どもがいて、逆に保育者が「エッ」となったりするのですけれども、ページをめくって１ページずつを喜んで見て動かない絵を動かす力を持っているのが本来の子どもなのですね。ここのページとここのページは止まっている絵なのだけど、物語を耳から聞き空想の中で動かしていて、絵の流れを見て、ああ面白いなと思うものを、もうすでに映像化されているもので見ている子どもたちもいる中で、私たちは絵本を読まなければならなくなっています。

それと、ひらがなに出会う年齢が毎年早くなっています。前は年長組くらいでぽつぽつ読めたり、一人で読むと言った子どもがいたのですけれども、今は３歳児でひらがなをもう読み始める子どもがいます。すると家庭でどういう現象が起きているかというと、「読めるんだから一人で読みなさい」がものすごく多くなります。私たちは０歳から絵本の貸出をしていますけれども、やはり４歳、５歳の子がよく借りていくわけですが、「一人で読めって言われる」という子どもがいっぱいいるのですね。

父母の会があるたびに、「絵本は大人に読んでもらうものです」と口を酸っぱくして言っているのですが、ひらがなを辿りやっと読めるくらいなのですけど、読めるイコール一人で読みなさいになってしまうのも不幸な現象だなと思います。

なぜ、読むことがいいのでしょう

絵本とは何かと言いますと、耳から言葉を聞くということだと思うのですね。幼児の時代だけではなくて、小学校１、２年生くらいまでは耳から入る言葉の豊かさというものが、とても大事だと思います。

新潟にも昔話を聞きに来たことがたくさんありますし、岩手とか福島とかいろいろな所で昔話を聞きましたけれども、たくさん語れる方たちは、昔みんな耳から聞いていたのですね。私は昔話を覚えるとき、文字から覚えます。ですから、長い間語っていない昔話は忘れていってしまうのです。何回も何回もやっていないと。やっぱり耳から入ったものと文字から入ったものは、何かが違うのではないかとそんなふうに思います。

語った言葉を子どもたちは、その人の肉声、ぬくもり、その日の条件、暗い部屋だったとか、先生が忙しそうにしている中で読んだとか、そういうことを覚えていて、やっぱり本というものを味わっているんだと思うので

すね。ですから、子どもはどこでその本に出会ったかということも、私たちは意識して大切にしないといけないと、そういう時代になってきたのではないかなと思います。ですから、皆さんがいろいろな立場で子どもたちと接しているとき、言葉で直接語りかけるということが、いかに貴重で本当に子どもたちにとって尊いものかということを私は痛感します。

覚えてくれていることは、圧倒的に誰から聞いたかということなのですね。本というのは、私は関わりの中で生まれるのが子どもの本の特徴だと思っています。関わりの中で耳から入るのがお話だなと思います。今、いろいろな絵本作家の方がいらっしゃいますけれども、ああ、この方は小さいときから、よく聞いていただろうなって思うことが、本を見ていると何か分かる気がするのですね。じゃあ、なぜ読むことが、読むことが子どもの暮らしにとっていいのかということですけれども、今「ゆめのたね」の方がおっしゃいましたけれども、本が保育の場にあっても無くても保育はできるわけですね。でも、絵本があることで、もたらされるものの大きさというのは何なのだろうということを考えますと、やっぱり本というのは子どもの体験を広げるものなんだと思います。それから、体験だけではなくて、人の心のありよう、気持ちとか、そういうものも広げてくれるものなんだと思います。

私は保育の世界に入ったときに言葉につまずいて、言葉は本当に難しいと思いましたけれども、子どもたちは言葉を広げてもらうのですね。例えば、５歳とか６歳までしかまだ子どもが経験していない、生まれて５年、６年しか生きていないというと、体験する幅も質も量も本当に少ないものですよね。でも、本を読んでもらうことで、その中のいろいろな人と出会うことができますし、いろいろな出来事とも遭遇することができるわけです。

そういう意味で、子どもたちは今、ここで体験できないことを本の中で間接的にかも知れませんけれど、受け取っていくということをしていくなかで、人の気持ちが分かったり、不思議な世界があることが分かったり、昔があることが分かったりしていくことは、後々の人間理解、社会での暮らしというものを考えたときに、とても大きな入り口をもたらしているなと思います。

それから、幼児期後半から小学校に行きますと、例えば異文化、他文化理解なんていうのも絵本の中でいくらでもすることができるのですね。私たちの時代は、外国籍の方がたくさん日本にいらして生活を共にする。私たちの園にも中国の方や韓国の方がいらっしゃいました。そうすると、韓国から来た子どもに、韓国の絵本を読んであげたりすると、ものすごく親御さんも喜ぶのですね。ああ、うちの子も大事にされているなと。似ているけど違う暮らしがあるね、この子の暮らしていた所の本だよというだけで、子どもは「ハッ」となって、ああそうかと思ってくれる。大きくなれば、国籍とか宗教とか文化、風習の違いにも、子どもたちは間口を広げていく

と思うのですけれども、そんなふうに読むことで生まれる広がりというものは、暮らしをより豊かにしてくれるものなんだと思っています。

絵本を読むことで、子どもたちが得るたくさんの宝物

①　言葉の力・言葉の魅力

それと併せてですが、読むことで子どもたちが得るたくさんの宝物、ここには五つだけ書きました。絵本と併せながら皆さんとそれを見ていきたいなと思います。

一つは、言葉の力、これは大きいなと思います。私たちが保育の中で丁寧に分かりやすく的確な、短い言葉で子どもたちに接しようとして心掛けています。でも、うまい言葉が見付からないときほど、だらだらくどくど同じことを言ってしまうのですね。叱るときもそうですね。でも、本の中の文章というのは、さすがに練られています。そういう余計なものを削ぎ落として、こうしか表現できないという言葉があります。それだけではなくて、擬声語、擬態語も含めて、語の響き、それから表現の仕方、間とか力強さとか、繰り返しの面白さとか、そんなことも私たち以上に子どもに豊かさをもたらしてくれると思います。

私たちは、年齢によってたくさんのものを子どもたちと読み合ってきましたけれども、例えば大きい子どもたちですと、年長組はそれはもう言葉遊びが大好きで『ことばあそびうた』を読んでいました。これは今は小学校でたくさん使われていると思いますけれども。年齢によって言葉と出会うことは一杯あると思いますが、赤ちゃんのクラスでは『もこもこもこ』とかよく読んでいました。

言葉と出会うと言っても、年齢が小さければ小さいほど語感、語の響きと最初に出会うのではないかと思います。そして、言葉に意味があって、その表現とかメロディがあるということは、少しずつ大きくなるにしたがって分かってきますね。すると、なぞなぞだとか、逆さ言葉だとか、あいうえおの本だとか、早口言葉だとか、定型詩ですね。ここまで五、七、五で語る言葉とか、言葉一つをとっても本当に小さい子から大きい子まで、いろいろな楽しみ方があります。『マザーグース』のようなもの、あるいは詩なんかもあるわけですね。

赤ちゃんのときは私たちが表現しようもないような、『もこ　もこもこ』って不思議な絵と言葉ですよね。保育の中で、「もこもこもこ、しーん」なんて言わないですよね。でも、本を開けば保育者が言いそうもない言葉が響いてくるというのは、子どもにとってはものすごく新鮮な体験だと思うのですね。

音の響きと、それを表す絵がマッチしていて、子どもたちは食い付いてくるのですね。その中でハッとなったり、わーっとなったり、ふんわ、ふんわってなったりする世界の広がりがあると思います。もこもこもこ、にょきにょき、ぱく。本当はもっとゆっくり読むの

です。もぐもぐ。つん。ぽろり。ぷうっ。ぎらぎら。ぱちん。とか、そうやって。

１歳児は、体全部で音をキャッチするので、この同じ本を３歳に読む、年長組に読むのと全部年齢によって表れ方が違うのですね。大きくなると意味を読み取ろうとするので、「ぱちん」と言うと何とかみたいとか、「ぽろり」の所はおっぱいみたいとか言うのですけど、１歳は何も言いませんから、ハッとなったり、はーっとなったり、あーとかやって、体全体で表していく。その年齢発達も面白いですし、音に対する受け止め方が、かくも違うのかと思ったりします。

私は、小学生と本を読み合うということは数少ないのですけれども、動物、これは小学校の子どもたちと楽しみました。「日本には五、七、五で気持ちを表す言葉があるんだよ。俳句っていうんだよ」って言って、これはそれぞれの動物が自分のことを語るという動物の俳句遊びなのですけれども、いもむしのページでは、「いもむしが　ふりそでをきてちょうになり」と、こんな洒落た言葉ですし、「ばけものの　はえにのまれた　けさのゆめ」けろけろとか、そんな五、七、五なのですね。

小学校の子どもたちに、「五、七、五で気持ちを言うことができる？」という話を遊びでやったのです。「おかあさん　はやくごはんを　食べたいよ」。上出来、上出来とか言って五、七、五だねと言ったのですね。そうしたら、ああ、こんなんでいいのかと思っていろいろなことを伝えてくれたのですね。さすが、こういうプロの方は作り方が違う。でも、ある条件の中で言葉を考えるというのは、ある年齢になったときにやっぱりとても楽しい体験なのではないかと思ったりもしますし、工藤直子さんも含めて、身近にあるものがこんなふうにうたわれるということも、子どもたちにとっては言葉の体験ではないかと思います。

保育園、幼稚園の年齢の子どもたちも、やっぱり豊かな言葉の体験をさせてやりたいなと思います。すると、良質な本がもたらしてくれる言葉と、つまんないなあと思う本とあるのですね。同じ赤ちゃん絵本でも、できのいい本から流れてくる言葉の力と、何でこんなにくどくど言うの？という赤ちゃん絵本とかありますね。背中の所に「１歳の子のための本」なんて書いてあって、それを頼りに買われるお母さんもいらっしゃると思うのですけど、読んでみると、くどくどくどくど書いてある。新幹線、長いぞ、速いぞ、何とかだ、もうすぐ駅だ、何とかかんとか。ゴゴーでもういいとか、新幹線、それだけで十分だと思うのですけど、自信がないほど文章は長くなる。形容する言葉がたくさん増えていくのではないかと思うのですけれども、たくさんある言葉の中で、例えば絵本と言いますと、絵の印象がとても強いのですけど、言葉を吟味するということも同じくらい大事なのではないかなと思います。

②絵を読む楽しさ

それから、絵を読む楽しさ、これも子どもたちにとってはとても楽しみだと思います。たぶん、大人以上に子どもは絵に目を止める。そして、ハッとなってたくさんの発見を私たちに教えてくれると思います。

一番最初に子どもたちが出会う本の中に、こういう本『くだもの』があります。物語の本に入る前は、０歳とか１歳はこういう物の絵本で子どもは遊んでいます。マンマ、マンマ、マンマ、ブブ、ワン。それだけの時代があってから、今ここに生きているだけですけれども、そうやって見ているから、物と言葉しかないかと思うと、そうではなくて、手。ああそうか、いちごって手で食べるかとか思ったりもしますし、しゃべられるようになると「はっぱ」。はっぱが付いているって教えてくれたりとかするのですね。じーっと見ていて、大人がハッとなるようなことをちゃんと見ている。すると、どんな絵で描かれているのが子どもにとって親切で丁寧かということもあるかなと思いますし、こうやって物の絵本をいろんな関わりを通して楽しんでいくと、子どもたちは筋のある本をやがて見るようになっていきますね。

『おつきさまこんばんは』は、物語の絵本のファーストブックともいえる作りというのは、こんなにシンプルな流れなんだと思うのですけれども、お月様が屋根の上に出てきて、そのまん丸いお月様が雲に邪魔をされて、だめだめって言われて、どいて、ああ良かったっていうだけの、本当に短い時間の流れの中に、物事の進展、起承転結があって終わるという本の形、物語の形というものが見事にここに凝縮されていると思うのですけど、私たちはついつい文字を見てしまうのですね。これしか書いていないのに、「おつきさまこんばんは」っていう文字を見ている。すると、１歳の子どもは聞きながらじーっと絵を見ているわけですね。ゆっくりめくってやると、子どもはお月様にまず目がいくのだけれども、何度も見ているうちに、ここに２匹の猫がいることを見つけて、「あー、あー、あー」って言うのですね。最初はお月様を「あっ」って言ってたら、猫さんも見つけたんだねって言う。いろいろな所にいろいろな猫の格好をしたものがいて、「おしまい」って言うと、ある０歳児の担任がびっくりしていましたけど、「おしまい」って本を閉じたら、べろを出す子がいるのよねと。何かと思ったら、本の中のお月様がベロを出していた。これを真似していたんだねって。もう０歳児でも、こうやってべーって。ねんねって言えなくても、「ああ」って目を閉じているのですね。

そうやって幼いながらも、描かれた絵をなぞって、自分で真似て、自分のものにしてしまうという体験、絵の体験を自分のものにしていくという実体験との往復がやっぱり空に上がってきた月を見て、「あ、あ」って言って、ハイハイしてこの本を見つけにくる子どもがいたりする。「ああ、ああ」ってやる。『ねないこだれだ』なんかもそうなのですけど、部屋の中にある柱時計の所へ行って、ぼ

んぼんと鳴ると「おおー」って言って、こうやってそのページを持ってくる０歳の子どもがいたのですけれども、あれだけちゃんと見ているってびっくりするよねって、そんなふうに言っています。

やがて、そうやって子どもたちが「あ、あ」と言って小さな発見をした指さしが、物を見るときの目の細やかさに成長していくのだと思います。それは、「どうして？」という目になったり、「ここにもいたね」とか「これ見て」とか「この人泣いてるよ」という細かいものを発見する「あっ」になっていくとすると、絵を見るということは絵を読むということなのだなと思います。逆に言うと絵を言葉で表しているということ。じゃ、描かれる絵って、どういうものがいいのかなということを私たちは子どもから教えられます。

絵本を選ぶときに、数冊のものを比べ読みして、園でどれを買おうかというときに、やっぱり子どもたちというのは確かな判断力を示してくれます。私たちの中に、子どものような目を持つ部分と大人の目も持っている、そういうことが子どもの本を選ぶ指針になっていくのではないかなと思っています。それから、子どもたちは本を読んでもらうことによって、周りの環境・自然に、本当に目を止めるようになっていきます。

③自然を楽しみ見つめることや、身の回りのものへの関心のたかまり

私たちが、絵本を子どもたちに読むといいますと、物語絵本が主になりがちなのですけれども、子どもというのは、それだけではなくて、とても敏感にいろいろなものに好奇心をもって、虫だとか花だとか宇宙、自然現象とか、いろいろなものに興味があるわけですね。そういう興味とか関心に応えてやるという意味で、物語絵本が７くらいだったら、２とか３くらいは自然のものを取り混ぜてやるとか、行事だとか季節感だとか、そんなものを織り交ぜていくうちに、子どもが自分で発見していくことになると思います。はっぱがあるとか、たんぽぽの綿毛を飛ばすとか、だんご虫を見つけてきて、どれがオス、メスかとじっと見ると、そんなときに私たちはいろいろな本を見ては探すわけですけれども、年長から小学校にあがるくらいに向けては少しずつレベルアップをしてやって、難しい本とも出会わせていきます。

最初の頃はやさしいものから選びますけれども、これは科学絵本の一冊ですけれども、『みんなおなじ　でも　みんなちがう』。一つの種類、みんな同じように見えるね、でもよく見ると一つずつ違うんだねっていうこと。あさりも一つとして同じ柄はない。開くといろいろなものが出ている。ひまわりの種だって、よく見ればみんな違う。こういうものを見るとびっくりするのですね、子どもは。「本当か？」って言ってすぐ寄ってきて、友だち同士で、「絶対同じのがあるはずだ」って見る。それが面白いですね。同じのがあったって、いいんですね。うずらの卵。本当に違う。

「嘘か本当か、お家に帰って食べるとき見てごらん」って言ってます。

子どもの興味のあるページとあんまり関心のないページとかあるのですけど、これは好きでしたね。しょうが、面白かったですね。さくらんぼだって、そうなんだよとか。かたつむりとか。子どもが喜んだのは、うめぼしでした。皺の寄り方がみんな違うって言って、いろいろなものがあるのですけれども、ほかにもみのむしとか。

あるとき、私はもう園長になっていましたけれども、年長組の部屋に行ってこの本を読んだのですね。そして、いつもは感想とか聞いたことはないのですけれども、科学絵本とかというのは遊び込んでしまいますから、「おもしろいね」とか、「他にはどんなものがあるんだろうね」とか子どもが言っていたので、「おしまい」って言った後に子どもたちと遊ぼうと思っていたら、一人の男の子が言ったのです。「人間は？」って。「ほう、きたか」と思いました。そのクラスはやまぐみといって子どもは25人いたのですけれども、「人間は？」って言ってきたのですね。友だち。みんな同じだって言うのです、みんな。だけど、５歳の子も６歳の子もいるねとか、名前が違うねとか、髪の毛が長いとか、めがねをかけているのが一人いるとか言って、みんな同じだけど一人一人違うんだねってなって。そうだよ、みんな大事な人なんだよっていう話をしたのですけれども、すると家に帰ったときや園庭に出たりすると、石ころを拾ってきて見比べたりとか、どんぐりを拾って見比べたりとかするのですね。やっぱり、何かが引き金になって良く見てみようということが広がっていくわけです

私たち、本を選ぶときには、子どもの年齢のことを視野に入れるのですね。これは何歳くらいがいいかな、何年生かな。その次に季節感というものも大事にすると思うのですけど、それプラスアルファ、子どもが今持っている興味、どんな世界を広げてやったらいいのだろうかということも併せて考えます。子どもたちは今、言葉遊びに興味を持っているとか、いろいろなものの違いに興味を持っているとか、それから人間の心、喜怒哀楽とか気持ちが分かりだしたとか、そんなときにはちょっと間口を広げるものがあると面白いと思います。本を選ぶときに季節というのもとても大事だと思っています。例えば梅雨どきなんかは、本当の傘を持って行ってみんなの前でパッと開いてやる。私、そこにバケツをそばに置いておいて、傘の上に、「今日はね、お部屋だから本当に雨降ってないよ、ここにね、先生が雨みたいに傘の上に水かけてみるからね、音はどんな音がするか聞いてみて」と言って聞かせてやったのですね。

子どもって、いろいろな音を発見するのです。傘もビニール傘と布の傘で違います。それから、落とすスピードや量でも違うんですね。「じゃあ、傘さして外へ行こう」と言ってみんなで傘をさして外へ行って「音を見つけてごらん」と言って、そのあとで『おじさんのかさ』とか子どもたちと読んで遊んだりしました。

どこから世界を広げるかということは、たくさんの入口があると思います。これは物語絵本ですけど、このおじさんは偏屈なおじさんで、何かもったいなくて傘をささないのですね。自分の傘を濡らすのはいやだから。それで、どうやって心が柔らかくなったかというと、傘を持って出掛けた先で子どもに出会って、子どもを見ていたら雨が降ってきて、子どもはさっと傘をさして、そのときに「雨がふったぴっちゃんちゃん　雨がふったらぽんぽろろん」と、雨が傘の上に心地よい音を響かせると、「え」と言って、本当か？さしてみるといい音がしているのです。そして家に帰ったら奥さんも奥さんで、「なんで、あなた、傘さしてきたんですか？」って言う奥さんなのですけれども、それを聞いて子どもたちは大笑いをしていました。

これは、ある年齢だったら「変なおじさん」という捉え方なのですけれども、小学生の捉え方はまた違うのですね。それから、ある方は老人施設で読まれたのです。振り返ってみて、いろいろな人がいたということを体験した方が味わうとまた全然違う読み方をして、とても面白かったよということを聞きました。自然というのは、本当にいろいろあって、季節感を子どもたちに伝えていくことも大人である私たちの責任というか、仕事の一つなのかなと思います。

④童話につながる物語の面白さ

たくさんの本があって、今日はご紹介できませんけれども、もうひとつ、童話につながる物語の面白さ。これは大きいと思うのですね。なぜ本を読むかということは究極の目的はきっと、その子が一人で児童文学なりを楽しむ、大人になったら小説なりを一人で楽しめるようになってほしいと思って、私たちはその入り口の橋渡しをしているのだろうと思うのです。

本って面白いよということが、いろいろな形で子どもたちに伝わっていくといいと思います。それで、ときには科学絵本を読んだり、ときには昔話を伝えたりしていくわけですけれども、童話につながる物語の面白さを伝えていきたいなと思っています。

伝えたい絵本を２冊だけ挙げますけれども、どの年齢でも、どの時代の子どもたちでも必ず読んできた本ですね。４歳児以上５歳まで。本当は絵本なのですけど、童話の形をしている絵本。ただ、20 分くらいかかるので体調のいいときで、子どもがちゃんと落ち着いているときにきちんと読んであげると、ものすごい勢いで子どもたちがしっかりついてくる。しかも、この『あおい目のこねこ』は、いじめにあうのですね。本当にいじめられる。黄色い目の猫たちに目の敵にされる。お前は青い目をしているから変な猫だと。ところがくじけない。底抜けに楽天的で前を見ている。とってもいい猫なのですね。冒険心も大きいし、目的はねずみの国を探すことで、そこに行ったらもう食い物には困らない。だからひたすらねずみの国を見つけに行くと

いう話で、もうめちゃくちゃ面白いナンセンスなお話で、なお優しいことに、さんざんいじめた黄色い目の猫を呼びに行くのですね。「ねずみの国、あったよ」と言って、最後はみんなでねずみを食べるという話なのですけれども、子どもたちは一人でひらがなを読めるようになってもこういうものはすぐにはこなせるものではありません。

ひらがなを辿り読みをしている時代というのは、物事のニュアンスは嗅ぎ取れないのですね。ぐりとぐらといってみても、楽しさというのはリズム感だとかは伝わってこない。それから、主人公の気持ち、感情の表れも伝わってこない。会話が会話らしく伝わってこない。

だから、一人で読むことって、しんどいことだと思うのです。繰り返し聞いたお話で、もう暗記しているものを一人で読む分にはまだ楽かもしれませんけれども。最初はやっぱり大人が読んであげるのが基本だと思います。子どもは絵本をたっぷり読んでもらい面白かった経験があればこそ、一人で読めるようになるんだと思います。私は園の子どもにはそうしていましたし、そうして小学校に送り出してやりたいなといつも思っていました。このあと、もっと面白い世界がいっぱいあるからねって、伝えていきたいと考えています。

中川李枝子さんの『けんた・うさぎ』ですけど、日本語の使い手として見事だなと思うのですね。子どもに分からない言葉は一つもないのに、ここまで表現できるかという意味で上手いと思います。

私たちは、いろいろな作家と出会うわけですけど、例えば内田莉莎子さんの文章、石井桃子さんの文章、中川李枝子さんの文章、松岡享子さんの文章、瀬田貞二さんの文章。全部違う文体をお持ちなのですね。ご自分の文体をお持ちです。どれも小気味がいいというか、本当に子どもと一緒に楽しめる、見事な抑揚のある歯切れの良い、きちんとした日本語だと思うのです。

そういうものを読んでいますと、新しい本に出会ったときに、おやっと思う勘が働いてくるのではないでしょうか。これ、だらだらしているな、とか、まどろっこしいな、こう言わなくたっていいのに、とか。感傷っぽいなとか、過去をくどくど言うなんて今の子どもたちに合わないな、とか、そんなふうに思うのですけど、中川さんの文章などを読んでいると、子どもに伝わる日本語っていいなと思います。実になかなかいいですね。渡辺茂男さんの文章も、子どもによく分かる文章で、私は見事なライターだと思っています。

絵本を読んであげる目的の一つにいずれ童話につなげていくことがあるので、そのためには、赤ちゃんのときから本は楽しみのためにあるもの、子どもに読んで楽しみが伝わればいいと思います。子どもだけが得するのではなくて、結構読んでやっている大人のほうが発見をして楽しんでしまうということもあると思います。

⑤大人と子どものつながりの深さ・確かさ

それから、大人と子どものつながりの深さですね、これは本を読んであげればもう実感できますね。読んだクラスの子どもたちは、必ず担任のことが好きになるのですね。保育者はいろんな技術が必要なんですが、例えば、音楽や絵を描いたり、人によって苦手なものもあると思いますが、本を読むことは誰にでもできます、声が出ればいいわけですから。

そして、毎日毎日読んでいるうちに、先生のことが大好きになるのですね。そして子どもは、その大好きになったことの証拠を見せてくれます。４歳児後半くらいから、「怖いお話して」と言うのですね。絶対嫌いな人には言わないです。怖い人には言わないです。だって、怖い人が怖い話をしたら、本当に怖いでしょう？だから、許せる相手にしか言わないのです、子どもは。怖いお話してって。そうしたら、もうしめしめですね。もう、うんと怖いのやっちゃいます。部屋を暗くするよと言ったり、あるときは電気を消しちゃったりして、でもそこまでくるにはうんと時間がかかりますね。

そうやって、「おしっこしたくなっても知らないよ」とか、「怖くなったら私のどこを掴んでもいいよ」とか言いながら、ホラー話だったり怪談だったり、外国の昔話のちょっと怖いのとか、いろいろなことをして遊ぶのですけど、そうやって遊んだことを 30 何歳になっても覚えています。あるとき、クラス会をしたのです。38 歳になった時クラス会をして、一番楽しかったのが怖い話と言って、「何を聞いたっけな」という子もいるのですけど、だけど暗くしたとき、先生がすごい声を出して、低い声で話をしてくれたのが一番面白かったっていう子どもたちがいると、他のことは拙くても、ああ、許してくれたんだ、この子たちはと思いました。怒鳴りまくっていても、こっちは忘れてくれたんだとか、そんなふうに思っています。

大人と子どものつながりというのは、その日の空気感まで子どもたちは覚えていてくれて、嬉しいですね。何の話という話の内容よりも、その日どんな状態だったか。すごく暑い日だったとか、そういうことも含めて、物語なのかって思って嬉しくなります。

子どもたちが楽しんで読んでいる絵本のいくつか

赤ちゃんなら～

その次ですけど、子どもたちが楽しんで読んでいる絵本のいくつかは、今、ご紹介いたしました。赤ちゃんならということで、『くだもの』の本と『おつきさまこんばんは』を見ていただきました。ちょっと大きくなるとお話の本にいくわけですけれども、まだ絵本に抵抗を示す、距離感を置いて見ている子どもたちもたくさんいるのですね。

物語というのは、何歳になったから分かるというものではないのですね。３歳児だから

お話の本を聞いているかというとそうではなくて、２歳児でも食い付いてくる子もいるし、３歳でもまだまだ入ってこれない子もいます。何が違うのか。その前にどれだけ言葉のある暮らしをしてきたか。目をとめる。耳をそばだてるということを楽しんできたかということが大きいと思うのです。本を読んでいたか、読んでいなかったかというよりも、聞くことをおもしろがる、目を合わせることをおもしろがるという子どもたちは、４歳で入園してきてもパッと本を見たりして、おもしろいものなんですね。

でも、まだまだみんなが見られないなと思うときには、遊びの本から入ってしまうこともあります。『じゃぐちをあけると』これを読んだときは、もう大変な目にあうくらい、水道の出しっぱなしが多いのですけど、ただただ、蛇口なのですね。だけど、大人になってしまうと思い出すけど、必ずやったことだと思うのです。蛇口の所に手をふさぐとじゃーっとなったり、ぱしゃっとやったり、両手で包んだりとか、いろいろなことをしましたね。

すると、まだお話の本を聞けなくてもハッとなって見るのです。「後でお庭に行ってやってみよう」と言って、子どもは飛び出して行く。物語の絵本も読んで欲しいなと思うとき、入り口をやさしくハードルを下げてあげるという意味で、こういう本もありますね。

それから『にゃんきっちゃん』。これはこのカメラマンのお家で飼っている猫を、ただただ写しただけなのですけれども、さっきの水の本と違って、今度は表情の読み取りを子どもが楽しむのですね。なんか眠たそうとか、お腹いっぱいみたいとか話が出ます。瞬間を写したとても美しい写真集で、まどろんでいる猫とか散歩先で見た猫の話をしたりするとき、こういう絵本を取り上げて、あ、この子たち今集中しているな、もう１冊読めるな、じゃ１冊読むねと言ってお話の本を読んだりもしています。入口や合間にこういうものを使ったりとかもいたしました。

そうやって子どもは、ああ、本って開くとおもしろいな、目の前にいる大人は言葉を自分たちに差し出してくれるんだなと感じていると思います。そういう楽しいものを読んで、私は年齢が低ければ低いほど、生きている肯定感というのでしょうか、明るさ、楽しみ、いっぱい食べたあとの喜びとか、そんな「ああ良かったね」という感じのものを、まずは読んであげたいと思います。

その後いろんなことが分かってきて、いろいろな経験を重ねていくと、悔しさとか悲しさとか憤りみたいなものとか、それからハッピーエンドではないものもあるとか、そういうものはしばらく経ってから読んであげるといい、そんなふうに考えています。

ボランティアをなさっているお母さんが近くの小学校にいらして、毎朝のようにいろいろなメンバーの方が読まれているのですけれども、あるとき２年生の卒園児が窓口の所に来て、「先生」って言いに来たのですね。学校が休みで「おはよう」って言って、いろ

いろな話をしていったのです。「今度、劇やるから見に来て」。「いいよ、何やるの？」。「スイミー」。「ああ、おもしろそうだね、しゅうちゃん何になるの？」。「こんぶ」。その子本当に集中力がないというか、ふらふらしている子だったのです。それでも「こんぶやりたいと言ったの？」。「違う。先生がこんぶって決めたの」って言うのです。なるほどなとは思ったのですけど、「本当は何になりたかったの？」。「さかな」。「どうして言わなかったの？」。「学校というのは、そういう所」って言うのです。でも、「こんぶでも、楽しくやるんだよ」と言ったら、「うん。ねえ先生、保育園のときは違うよね。自分たちでやりたいものを決めたよね。学校は違うんだよ」って言うのです。

そのあとにボランティアの話をしてくれたのです。「朝、学校に本を読みに来るおばさんいるんだ」って言うのです。一人は知っている方でした。「あのおばさん来る日、嫌い」とはっきり言うのです。「いろいろな人に本を読んでもらっていいじゃない？」って言ったら、「嫌」。「どうして？」と言ったら、「悲しい本しか持ってこないんだ」って。本を選ぶということは、その方の趣味が反映される、好みが反映されるのです。だから、自分にとっていいな、心に触れるなと思うものを選ばれるのだろうと思うのですけど、子どもと合わないのだと思うのです、それが。

経験を重ねてきた方は、面白いものや不思議なものや、たくさんご存知だけど、大人になって自分にハッとするお話は命のこととか、やっぱり悲しみの問題が今は自分にとってとてもいいなと思って選ばれるのだろうと思うのですけど、２年生の子にとっては嫌なのですね。朝からそういう泣くのばっかりとか言って。ああ、そうかと思ったのです。

たくさん、いろいろなものの中に、そういうものが含まれていればいいのですけれども、一色になるというのは良くないなと、子どもたちにとってもあまり健康じゃないなという気がしました。本を選ぶというのは、とても難しいと思います。

ちょっと大きくなった子どもたちの興味
鍛えられていく目や言葉

そこのところでは、ちょっと大きくなった子どもたちの興味とか、鍛えられていく目や言葉とか書いてあるのですけれども、大きくなっていくにしたがって、子どもたちって本当にいろいろなことを体験するのですね。４歳児のときに、この本が大好きだった子がいるのです。『100 まんびきのねこ』。石井桃子さんが訳されています。絵本の歴史の中で、本当に最も古い部類に入る100年くらい前にアメリカで出された本なのですね。でも、今でも読み継がれているというのはすごいなと思います。

黙っていると学生は、こういう本に手を出さないです。なぜかというと「色が無いから」

と言います。「絵本をどうやって選ぶ？」と聞くと、「きれいな絵、かわいい絵」って言うのですね。こういうのは寂しいとか、「色が無いなんて子どもが喜ばないんじゃない」ということで手に取らないというのは残念なことです。どんな物語で、その物語にふさわしい絵かどうかということは、色がある無しではないと思います。おじいさんとおばあさんが二人で暮らしていて、「猫がいたらねえ。猫を探してくる」と言っておじいさんは猫を探しに行くのですね。長い旅をして、いっぱいの猫に出会う。１匹の猫、10 匹の猫、100 匹の猫、100 万匹の猫。たくさんの猫と出会います。子どもたち、さっき絵を見る力が「あっ」という発見から始まって育っていくと言いました。４歳児でこの絵本が大好きだった子どもは、このページ、おじいさんが猫の国というのでしょうか、猫がいっぱいいるページにあって、みんな自分をアピールするのですね、自分を連れていってくれという、そこにも猫、あそこにも猫、どこにもかしこにも猫が描いてある。すると、その子はじーっと見ていて、１匹ずつ何をしているかと言うのです。これは立ってこうやっているとか、自分がいいよと言っているとか、これは水玉の猫だとか、これはしましま。本当に子どもって良く見ているんだなと思って、ここをめくるのはものすごく時間がかかったのですね。「分かったよ、ここだけは少しゆっくり見て次いこうね」と言ったのですけど、あとのページもそうなのですね。そして、「これはゆっくり見なくちゃね」と言って、それも時間がかかってしまったのですけれども、本当に細やかに描いてあります。

すると、子どもたちは絵本を楽しむというとき、何ていろいろな楽しみ方をしているのだろうと思うのですけど、なんとその子が年長組になって、どういう子になったかといいますと、これを好きになったのです。『ちいさいおうち』。これは本当は、本当の意味で言えば、ときの流れがテーマですからもっと大きい子、小学生だと見方がもっと変わると思うのですけど、細かいものを発見する名手でしたから、これを好きになったのですね。何回も借りていくのです。でも毎週末無くなっちゃうのです。どこかにいっちゃうのです。そうしたら、その子は自分の本を取られたくないから、前の日に隠しておいたのです。ピアノの後ろとか道具箱の横とかに…。だから無いのです、本当に。巧みに隠すというのか、３、４回目に分かったのです。私は、あれ、おかしいと思いましたが、他に探している子もいるのにないわけです。でもないので、そーっとその子の後をつけて行って見たのです。でも、本人は隠しているっていうのは言えないですからね。

あるとき、「これが大好きなんだね」って言ったら「好き」と答えてくれて。毎週借りていくわけですからね。仕方ないのでもう一冊買って複本にしました。「どうしてそんなに好きなの？」と聞いたら、クラスで一番やかましい子なのですけど、「静かだから」と言ったのです。この本の中に描かれている一軒の不動の家。人が売ったり買ったりできな

い価値ある一軒の家。これが時代の流れの中で、周りがどのように変化していくかということをこの子はじっと見ていたのですね。そして、「僕だけに読んでくれる？」と言ったのです。あるとき、周りの子たちが積み木をしたりして、部屋で安全に遊んでいるときに「いいよ」と言って、二人で見て読んだのですね。「ねえ先生、知ってる？飛行機どこから出てくるか」とか言うのです。それから、本当にすごいなと思ったのは、「スカート短くなんだよ」アメリカの開拓のほうですよね。最初はロングドレスを着ているのです。くるぶしまでの。それが辺りがせわしくなって馬車の時代から車になって、地下鉄まで通るようになると、女の人のスカートがどんどん上がっていくのですね。そして、それを見付けたのです。「スカート違う」って。「洋服、着ているもの違うよ」。スモッグとか、信号がどこに出てくるとか、彼はくまなく毎週借りていくから、いろいろな所を見ていたわけです。

それと、お母さんが偉いなと思うのは、これを読むのに 30 分くらいかかるのです。それを毎週毎週読んでくださるお母さんがいて、この子はじっとそれを聞いて見ていたのですね。

きっと、この子が最初の頃に言っていたのは、「このお家が笑っている」。それから、このお家がボロボロになってくると、「お家泣いてるよ」。そういうところから発見して、もっともっと違う所も見るようになって面白くなって、あと車の種類が変わっていく。セダン型になっていくのですね。そういうのもじっと見ていると、ああ、この子はアメリカの交通史を目で辿っていたんだなと思って、すごく嬉しかったです。そんなふうに鍛えられていく目というのが、読み継いでいくうちに子ども自身も育っていくのではないかなと思います。

喜ぶことがいいとは限らない子どもの本

さて、そこで子どもたちにとって、比較的喜ばしいと思える本を挙げたのですけれども、本を選ぶときに、子どもが喜ぶからといってそれがいい本なのかということを、皆さんもいつも悩まれると思います。最初に、水村美苗さんの言葉で紹介しましたけど、**「教育とは市場が与えないものを与えるところである」**というのは、保育の場でも教育の場でも無駄なことがいっぱい必要な場だと思うのです。市場というのは効率を優先するところですから、相容れないものです。子どもというものは、遠回りをしながら成長していくものですよね。

ですから、機械化も一番スローなところにあるのが保育の場ではないかと思うのですね。喜ぶということを中心にして子どもに本を買っていたら、子どもたちはやっぱりキャラクターものや飛び出してくるとか、そういう常に目新しいというのでしょうか、仕掛けのあるものに目が向いていくと思います。

でも、そういうものがおやつのように家庭にときにあることは、私たちも何も口を挟んだりいたしませんけれども、保育の場にわざわざ買わないということは何だろうということを考えますと、子どもが育っていく幼児期の今、このキャラクター、親しみのある見慣れたものかも知れませんが、それをわざわざ取り寄せなくても、別の絵柄の中に知見を見出したり感情の豊かさを育んでいくことのほうが物語に触れるチャンスが広がっていくし、深みもあるのではないかと思っています。私たち保育に携わる者は安易にはブームだからとか、今これがこの漫画がヒットしているからといって、お金を使うということはしません。図書館もそういうものを真っ先に購入したり子どもに勧めたりはしないと思います。家庭でそれぞれが勝手に買う分には別に何も言いませんけれども、私たちの保育の場ではわざわざ買って置くことはしません。

ある父母の方から、言われたこともあります。引っ越しするからといって、ディズニーのものとか、山のようにいっぱい絵本をいただいたことがあるのですけど、そっと処分をいたしました。その人がいるときにはちょっとそういうことはできませんけれども、ちょっと出しておいて、あとでそーっと、あるいはよそのバザーに出しちゃったりとか、秘密で出しちゃったりとかしたのですけれども、今、子どもに味わわせたいことは何かということを一番に考えたいと思っています。

ちょうど丸２年前に、私たちの法人が一つの保育園を引き受けたのですね。公立の園が民営化されるというので、私たちがそこを受けたのですけど、そこの 40 代の若い園長が私たちの所から行って、一番最初にした仕事が本の処分だったのです。段ボール何箱と処分したのですけど、捨ててはいけないのですね。区の物品ですから。お返ししたのです、全部。そうしたら、課長さんすっ飛んで来ましたよ。「なぜ返すのか。新しいのに、きれいなのに」とおっしゃったのです。「新しくてきれいがいいんじゃないんです」と若い人が頑張って言ったのですね。「子どもに読ませたくないと思う本だからお返しします」と。そして課長さんが、「じゃあ、どういう本をいいというのですか？」と言ったので順繰りに話していって、赤ちゃんのとき体験させたいもの、幼児に体験させたいものをお話して、理解してもらいました。その結果、本箱がこれくらいに減っちゃったのですね。

私も、段ボール一箱くらいプレゼントしましたけれども、順々に集めていって、今、区から来る人は「いい本が揃いましたね」と父母の皆さんもとても喜んでくださるけど、前にあったのがキャラクター本だったのですね。ほかにマンガ本や、昔話のダイジェスト版ですとか全巻揃っていたんですね、そういうものをたくさんお返しして申し訳なかったなと思う気持ちの反面、すっきりしてよかったと園長は言っていました。

絵本（童話）を選ぶために、私たちにできることは？

では、選ぶために私たちにできることということで、少しお話して高学年のほうにも移っていきたいと思うのですけれども、これは保育者の立場で私たちが考えていることなのですけれども、買うとか買わないとか、読みたいとか読みたくないということをどういう目で判断していたのかということですけれども、私は本当に絵本っておもしろいと思ったのは実は学生時代なのですね。私、生まれたのが 1944 年、戦争が終わる前の年ですから、自分の子ども時代にいい本なんて無かったのです。小学校高学年になって学級文庫で岩波文庫に出会ったくらいで、その前、本当にいい絵本なんか読んでいなかったのです。

それで、保育者になろうと思って入った学校で、すごい絵本とたくさん出会って、その中の一冊が『100 まんびきのねこ』だったのですね。びっくりしました、これを見たとき。なんてすごい物語る絵なのだろうと思って、私が今まで勝手に抱いていた絵本の絵に対する思いを払拭してくれた一冊でした。『三びきのやぎのがらがらどん』もそうでした。さて、保育現場に出てどうだったかといいますと、私は二つの保育現場を経験したのですけど、幸いなことに二つともいい絵本の置いてある保育園、幼稚園だったのです。

最初に行った幼稚園は、初代の園長が本当に『こどものとも』の創刊号から揃えていて、平凡社の百科事典もあるというように、ものすごく厳選したものを置いている方だったのです。だから、遊びも素朴な遊びだったのですね。田植えをしに行ったり、ちゃんと田んぼを借りてしに行ったりとか、遠足も森みたいな所に行くとか、そういう園でした。

それから、職場を変えて保育園に行ったら、そこも本当にいいものを置いてある保育園だったのです。それで、迷うことが少なかった。でも、足りないものは家から持って行きました。学生時代からバイトで貯めたお金で買ったものがいっぱいありましたから、園に寄付したりとか、持って行ったりしていたのですが、さて職員と一緒にどんな本を買おうかと言ったときに、みんなで辿り着いた方法ということを申し上げたいと思うのです。絵本を選べるようになるためには、一つには子どもたちの成長、発達を知るということで、これは大事だと思います。これは赤ちゃん向けの本だねとか、これは誰でも分かりますね。

それから、赤ちゃん絵本を卒業して物語絵本が分かるようになった頃、どんな本があるのか。どれが適切かということは保育者だと体験上分かるのですね。分かる言葉はこれくらい、聞ける時間は３分くらいとか。それから聞き始めて慣れてくると５分になって、年長になれば 20 分とかって体験上分かってくるのです。そういう意味で子どもの言葉や理解力や感情も含めた発達段階と歩調を合わせながら本を選んでいくということを私は体験の中で学びました。

それから、季節感ですね。先ほど申しましたけれども季節感や行事、それも大事です。

春になれば自然に虫の本が読みたくなるし、野菜を育てる初夏は植物や野菜の本も読みたくなるということだと思いますし、選べるようになるためには、どんな本が出ているのかを知ることが大事だという意味で、園にもいろいろなジャンルの本を揃えています。

例えば、図鑑。これも絶対全集では買わないと私たちは決めています。図鑑も全集全巻は買いません。全集すべてが良くできている本とは限らないからです。ですから、必要に応じて選んで買ってきました。虫とか植物とか。あるいはアゲハとか蜘蛛とかタイトルで選んでました。あとの例えば岩石とかはまだ子どもに興味が薄いですし、宇宙とかは後で買えばいいわけですよね。そうやって、必要な良質な図鑑を選んでいきました。

それから、科学絵本。これは４歳児以降本当に大事で、子どもたちの生活や知識、知りたいという好奇心を満たすという意味で、科学絵本を揃えました。科学絵本にはたくさんのジャンルがあって、動植物、体、言葉、遊びってありますけれども、体に興味を持ち始める頃読んでやりたいもの。例えば、『おっぱいのひみつ』とか『う・ん・ち』とか『ほね』とか、子どもたちは大好きですね。『ほね』これも運動会の前に、体は何からできているか、どうして走れるのかということを仕組みが書いてあるから、見てごらんと言って見たり、「みーんな動物は骨を持っているんだよ」と言って、「たこは骨無いんだよ。ほら、人間はね、骨があるから立っていられるよ。たこみたいになっちゃうね、無かったら」と言って、「みんなの中にこういう骨が入っているよ」と言いました。知識を生な形で伝えるだけではなくて、物語をとおして楽しく、しかも正確に体というのをある時期、子どもが知ると自分の体、人の体に興味を持って大切にするということもあると思います。

そういう意味で、科学絵本って、いろいろなジャンルで必要なものから揃えていくわけです。看護師さんのコーナーには子どもの体に関する本、全部ほとんど揃えておき、そのときどきで、例えば栄養のことや食べ物の本とか、歯の健診の頃読んでやる本とか、コーナーに本を置いています。

知識の本、こちらは数とか文字に興味を持ち出す頃なので、そんな機会があるときに読む本とか、実用書も本当に子どもにとっては大事で、例えば折り紙の折り方とか、あやとりだとかお料理の本とか、そういうものも子どもは大好きなのですね。でも、これが一番出来不出来が激しいのです。本当につまらないものから、よくできているものまであります。

あるとき、年長組の子どもが折り紙を好きになって、一人名人が出たのですね。本当に手の器用な男の子で、折り紙、定型のものでは飽き足りなくなって、自分でそれを４分の１に切って細かい小さい物を折るんですね。カエルなんかも上手に折っちゃう器用な子なのです。そして、私はあっという間にもう教えるものがなくなっちゃったのです。そうしたら、子どものほうから、「折り紙の本持ってきていい？」って言ったのです。家から

いろいろ持ってきて、5冊くらい集まったので、本箱だけ用意しておいてやったのです。その隣に折り紙の入れ物を置いていたら、それを見て子どもが折りだしたのですね。そうしたら、その博士がやってきて、私のところに。「先生、よく見てもできない本があるよ」と言うのです。「こっちのほうは見たとおり折れる。これ見てみな、先生、折れないから」と言うのです。「やってみな」と言われて、やってみるとできないのです。「ね。だめ」。それは誰々ちゃんが持ってきた本。お兄ちゃんからもらったという本なのですね。途中の経過が抜けているのですね。鶴の所までは前を見ろとか、解説が丁寧ではないのです。それで、はっと思ったのですけど、子どもに丁寧に書かれている本とそうじゃない本があるんだなと思って、子どもってすごいなと思いました。読めなくてもよく谷線とか山線とか分かるなと思って、私はひたすら感心したのですけれども、正確さというのを見抜いた子がいてすごいと思いました。

これは、言葉遊びの本。これもレベルによっていろいろな本がありますね。『じゅげむ』のようなものもあるし、ほかにも落語がベースになっている絵本があったりしますので、いろいろあるということをまず知ることです。

それから、写真集もあります。文章がある写真集ばかりではなく、文章のない『はるにれ』のような写真集もあったりします。手書きの絵だけがいいんじゃなくて、写真でしか表せないいいものもたくさんあるので、写真絵本もいいものを見ておきましょう。

そんな本もありますし、物語絵本もたくさんいいものがあるわけです。

選び方で、私たちが難しいなと思ったものを一つご紹介したいと思いますけれども、昔話ってたくさんあって、例えば昔話にはこれは、フェリクス・ホフマンという人が絵をかいているグリムの『おおかみと七ひきのこやぎ』の絵本です。

それから、『やまんばのにしき』。瀬川康男さん、松谷みよ子さんの文で書かれている。ものすごくお話も言葉も面白くて、絵がまた良くて子どもたちが大好きな、あんまり怖くないやまんばで子どもたちも大喜びしました。

これは関西、上方の落語がベースになっている昔話だと思うのですけど、『じごくのそうべえ』。これを読んで笑わない子はいない。本当におかしい。私、あるとき扇子を持ってベベンベンベンベンってやって、人格を変えて読むととても面白いですね、すっかりなりきってしまって、もう、うんちは出てくるはですごい本なんですけれど。しかも田島征彦さんのおどろおどろしい地獄が描かれている。子どもたちはこういう本も大好きなのですね。

それから、『かにむかし』。『さるかにがっせん』とか別のタイトルでもありますが、文章と絵で私はこれを選んでいるのです。これは、木下順二さんの言葉が見事で、「かにどん、かにどん、どこへ行く。さるのばんばへ仇討ちに腰に付けとるのはそらなんだ。日本

一のきびだんご、いっちょくだはり仲間になろ。仲間になるならやろうたい」。もう言葉が楽しくて、子どもたちと問答をしながら読むというので、とても楽しい。再話が見事な昔話絵本です。

それぞれ昔話には、いろいろなテーマがあったり、物語の運びがあったりして、それをいろいろな絵描きさんが挑戦して絵本になさっていると思うのですけれども、恐らく『ももたろう』が一番種類が多いのではないかと思うのですね。何十冊ってある中の、たった３冊。今日は３冊だけですけれども、それぞれの特色があって、私たちは『ももたろう』だったらどれを選ぶだろうという意味で、特色のあるものを３つ選んだのですけれども、出た順でいいますと、これが一番古い。この３冊の中ではこれが古くて、これは松居直、文。赤羽末吉、絵ですね。これは、瀬川康男、絵。松谷みよ子、文なのです。

これが一番新しく出た本で、2006 年です。まだ６年しか経っていないです。松谷みよ子、文。和歌山静子、絵というものなのですけれども、『ももたろう』って２つの流れがあるようで、一番よく知られている一般的な『ももたろう』というのは、こっちだと思うのですね、話の流れからいくと。おばあさんが桃を拾って持って帰って、おじいさんに食べさせようと思って割ると桃太郎が生まれて、いっぱい食べて大きくなって鬼ヶ島の話を聞いて、旅支度をしてもらって見送られて出掛けていきますね。犬と猿とキジに会って、おばあさんのこしらえてくれたきびだんごをそれぞれにやって海の向こうの鬼が島に着いて、そして鬼をやっつける。許してくださいと言うけれど、この本の違うところは、差し出した宝物をもらわないのですね。奪ったのは姫だけなのだから、姫だけ返してもらえればいいというので、それで帰ってくるという話で、私たちがよく知っている物語の一つの流れだと思うのです。

もう一つの『ももたろう』のお話は、最初のところは同じなのですけれども、桃から生まれた男の子はとても怠け者でぐうたらで、食って寝ているだけ。友だちが遊びに行こうと言っても嫌だ、鬼が島の話を聞いても面倒くさい、寝ている。とうとう、腰を上げて行く気になってその後の話は同じというものです。出だしのところだけ違う。とてもいい再話を松谷さんはなさったのですね。

でもなぜ６年前にもう一度これを作ったのだろうと思いました。私はもう辞めていましたけど、これが出たとき保育の場の人たちにこれは買っちゃだめだよと、言ったのです。すでによいものが出ているのだから、作り直さなくてよかったのにね。何でやっちゃったんだろうねって。最初は同じですが、生まれてから面倒くさがりやでいつも寝ていて、そしてやっと鬼退治に行くのです。そしてそこで戦いました。鬼を投げ飛ばしたが、まあ鬼のほうも強くて桃太郎は危なくなった。「おらは助っ人頼んでくる」とキジはぱっと飛び立った。「おおい、昔話の助っ人たち、桃太郎の鬼退治に来てくれ」。すると、カニが海からぞろぞろはい出してきて、「おお、手伝

うぞ」。さるかに合戦の石臼やら、牛のくそ、かちかち山のうさぎも舟を漕いできた。その上をハチの群れが飛んでいて、「桃太郎、今いくぞ。桃太郎負けるな」。犬も猿もキジもかにも栗もハチも石臼も牛のくそも兎も、それはもうすごい勢いで鬼と戦った。とうとう鬼どもをみんな退治した。そして、帰っていきましたとさ。という感じなのですけれども、ここのところに、なぜこういう話を書いたかというと、カバーが、カバーは図書館の場合外されてしまいますけど、ここは付いていますね。松谷さんの一言が書いてあって、５歳の孫がもっと出せってねだったというのです。

昔話って、どういうものなのかなと私は思うのですね。例えば、大人になってパロディが分かって、もとの話が分かるのなら、ひっくり返されても原形を知っているから、ハハハと笑い飛ばせるのですけれども、はじめに出会うものの印象というのは、子どもにはとても大きなイメージを植え付けていくものなのですね。すると、何と出会うのかが、その子の桃太郎体験になっていくと思います。やっぱり最初に出会うものというのが大事なのではないかなと思います。

例えば、グリムの『おおかみと七ひきのこやぎ』もいろいろな方が絵を描いています。日本の方も描いていますし、外国の方もたくさんの方が描いていますね。でも、グリムが採集したドイツ周辺で語り継がれていた『おおかみと七ひきのこやぎ』という話をどういうふうにホフマンが絵画化したらいいかってやっぱり考えたと思うのですね。ドイツのあの辺の周囲の景色というのはどういうものがいいのか、それから住んでいる昔の家というのはどう描いて伝えたらいいのかとか。

それは、日本の昔話も同じだと思うのですね。『つるにょうぼう』という昔話があれば、機織り、昔の機ってどういうものか、住んでいる家はどんな家なのかとか。どんな道具を使っていたのか、人はどんな着物を着ていたのかということを絵本の絵で表すにはどうすればよいのか。子どもたちは絵を見てそれがその時代のものだと思うわけですから、どんな絵柄にするかってとても大切で、丁寧に誠実に子どもたちのために描いてほしいと思うわけですね。

ホフマンの『おおかみと七ひきのこやぎ』では、おかあさんは着てるものはなく、おかあさんの象徴であるエプロンだけで描かれていますが、これでちゃんとわかるわけですね。絵本の絵は、その時代なり、舞台をちゃんと再現してくれるという意味で『おおかみと七ひきのこやぎ』一つを選ぶのでも、私たちにはとてもいろいろなことを教えてくれると思います。

今日、来る列車の中でずっと本を読んでいたのです。私たちの大先輩に当たる児童図書館の創設者だった小河内芳子さんという方が２年前に亡くなられたのです。ほぼ、石井桃子さんと同年齢の方なのですけれども、そのかたの追悼集が出て、ずっとそれを読んできたのですけれども、その中にアメリカへ子

どもの本の勉強に行かれたときのことが書いてありまして、同行された人のなかに人形を作って子どもたちに人形劇にして見せる方がいらっしゃったそうです。

そのときに、『三びきのこぶた』をご自分でお作りになって、アメリカの子どもたちに見せてやろうと思って持って行った。ホテルで稽古をしたのだと思うのですけれども、その方が幼い子に見せるからといって、三匹の子ぶたの、一匹目、二匹目が助かる方の話をしたい。最後も狼がぶたたちの所に駆け込むけど死なないという人形劇でやりたいといったそうです。小河内さん、ずっと何時間もねばって、それはやりたくない。それが『三びきのこぶた』じゃないでしょうということをおっしゃったのです。昔話って、そういうものじゃないでしょう、残酷だとか怖いものも承知の上で子どもたちに伝えてやるべきだということをおっしゃって、ねばりにねばった方なのですね。

小河内さんの選書の仕方というのも見事なものでしたけれども、保育の場でもそうなのです。対立することがあるのです。これは怖いね、ちょっと暗いね。子どもにとって酷かなと思うと差し出せない大人と、大丈夫だよ、お話なんだから。お話はお話ですっと読んじゃえばいいんだよという大人といるのですね。

でも、聞く側の年齢も考慮しなければいけないですね。怖いけど大丈夫というとき。もう怖い、怖いと言いつつよく読めるようになったときは何でもなく読めるのですけれども、一度怖い、これは子どもにとって読んだら何かトラウマじゃないけど、何かが染みついてしまうのではないかと怯えている人の保育観というのも片方にあるわけですね。

すると、物語に接したときに、「私はああいうのだめだわ」ってなってしまうのか、それとも年齢と、それから物語のいろいろなタイプということを考えたときに「ちゃんとした形で昔話を読んでやろうよ、語ってやろうよ」という２つの方法があります。どっちが丁寧でしょうか。子どもにとってどっちがいいかということを考えたいと私は思うのですけど、子どもたちに酷だとか、やさしいという方が親切なように実際は見えるのですけど、本当はそうじゃないんじゃないかと私は思います。

子どもって、それに打ち勝つ力を持っていますし、聞いて初めて分かる悲しみや悔しさや裏切りというものを、いつかは乗り越えなければいけないのですね、葛藤の中で。どこの時代に出会うかということはとても大事ですけれども、そこを甘くしたり、それからすっと逃げてしまったりしてしまったら、子どもたちってやっぱりきちんと向かい合うときにヘナヘナとなってしまうかもしれないと思うのです。そんなことを考えますと、物語って選ぶときに絵とか言葉だけではないような、中身の問題が意外と大事だと思うのですね。

あるとき、クラスでこの『かにむかし』を劇にすることにしたのですね。子どもたちが大好きだったのです。ほとんど全部覚えてし

まったのです。そうしたら、一人のお父さんがクレームをおっしゃりに来ました。「先生に言いたいことがあります。」と言って、「うちの子がこれを劇にするって決めたっていうけど、先生、今の時代に敵討ちはいけません。この民主主義の世の中に敵討ちはいけません。話し合いで決着つける時代に、敵討ちはいけません」とおっしゃるのです。「おっしゃるとおりですね。これはお話です」と言ったのです。

だけど、「話でも子どもが真似ます」。私は「真似ません」と言ったのですけれどもね。「例えば、テレビでウルトラマンとかやっていても、誰も飛び降りないよ。あれ嘘っこって知って見ていますよ」と言ったのです。「ああ、そうか」と言うのです。「でも、本は違います」と食い下がってきました、ずっと。

それで、私はそのときは小澤俊夫先生の書かれた昔話についての本を読んでいたので、ちょっとだけでも言っちゃおうかなと思って、「昔話ってね」という話を少しだけ添えて、お話って、これ子どもたちは敵討ちと思っているのではなくて、されたことの嫌さとか、正当でないことに対してやっつけて、ああ、悪い者がいなくなっちゃったという、最後のほうに喜び、そっちにウエイトを置いて聞いているのですよ。いなくなっちゃったね。本当に悪い猿だったねと思って、それを真似しようなんて思わない、ということを小澤先生の話の中からも、ちょっと引用して伝えたのです。そうしましたら「ああ、そうですか。真似しないと分かればいいんです」とおっしゃって、その年は『かにむかし』をしたのですけれども、とかく幼稚園とか保育園という場は、やさしさ、親切であること、仲良しであるということを見せるのですね。結果としてあまりほめられたことではないという見方もあるかもしれませんが、それを売ることがあるんです。売るっていうのはおかしいですね。前面に出すことがあるんですけど、それって親切なことではないと思います。やたら残酷なことを伝えるということではなくて、これは物語だからということを百も承知で子どもたちは聞いているのです。お話って聞き終わった途端に無くなっちゃうものですからね。大丈夫だよという信頼感を持っている人から聞けば、子どもは怖がらないということを伝えておきたいと思います。

もう一つの方を見ていただきたいと思いますけれども、そういうふうにして私たちはいろいろな種類のもの、年齢、発達、季節をとおして読んでいます。それらの中に、ロングセラーも一つの目安にということで書きました。初版がいつ出ているかって大きいですね。わあ、50 年読み継がれているんだ、40 年子どもに支えられてきたんだ。残っている理由分かるよねっていうことも一つの選ぶ目安になるかと思います。

ボランティアと子どもの読書

＜保育者や、教師が日々の暮らしの中で絵本を読んだり、童話を読むということ＞

ちょっとボランティアのところを見ていただきたいのですけれども、私たちは保育の場にいたのですけれども、出向いて読むということと暮らしを共にしている場で読むということの違いは何かということです。私も出向いて読むこともありますけれども、何よりの違いというのは、保育者とか教師もそうだと思うのですけれども、何よりも身近な親しい子どもと毎日を一緒に過ごしているわけですね。

すると、子どもたちの遊びとか興味を手の内に知っている。赤ちゃんだったら昨日無かった言葉を今日言っているとか、そういう変化をつかめるということは大きいと思います。

すると、選書の問題も浮かんでくるわけですけれども、同時に選書に失敗があってもボランティアの方たちと違うのは、いくらでも取り返すことができるのですね。ああ、失敗しちゃったと思っても。きっと皆さん、本を持って行かれる方はなるべく失敗しないようにと、もう選書の仕方に気をつけて持って行かれると思うのですけど、私なんかは年中失敗していました。長過ぎたとか、難し過ぎたとか、子どもはちゃんと言ってくれるのです。

あるときなんか、お昼寝しながらやたら難しい本を読み出しちゃったのです。そうしたら、一人の男の子がむくっと起きて、「替えてきていいよ」と。それで私は「ありがとう、今日失敗」と言って別の本を取って来たのです。「静かにしているから早く取ってきな」なんて子どもたちが言ってくれて「ありがとう」と言いました。そういう柔軟性がある。中で読むというのは楽でいいなとか思います。

それから、子どもの好みでも変えることができますし、気に入った本は何度でも繰り返せる。読み終わって「おしまい」って言った後、「もう一回」と言われるのです。「いいよ」と言って、もう一回読むこともできる。そういうこともできるし、２週間くらいおいてまた同じ本を読むということもできるのが、暮らしの場で読むということだと思うのですね。

反面、ボランティアをなさっている方たちというのは、失敗しないようにとか選書に大きな冒険ができないということもあるかと思いますし、それから絵本の大きさとかも気になさる方もあると思うのですね。小さくてもいい絵があるのですね。

例えば、ピーターラビットの絵本なんていうのは集団向きではないですよね。数人の子どもたちと読み合えば、あの絵をくまなく楽しめるけど、20 人、30 人の中では読めないとなると、選書に枠が生じてくると思いますし、では大型本がいいかというと、そうでもないのですね。大型本が出たことによって失敗した本ありますね。絵が拡大したことによってぼやけているのがあります。そういう本

もあります。向きが逆になっている本もありますね。

それから、童話などは時間の制約があって読めないということがあるかと思いますけど、暮らしの場だと、今日は１章、続きは明日ねという読み方ができるというのもいいことだと思うのです。そういう、どっちにも良さと制約がある中で私たちは読むわけですけれども、でも、保育の場もいろいろなのですね。

＜でも、保育の場もいろいろです＞

本当に、例えば体育的なこととか音楽的なことに重きを置いていて、あんまり本がない園もあります。学生も言います。実習から帰ってきて全然本がなかったとか。あるいは、あったけど躾の本しかなかった。「本を読んであげる」と言ったら「嫌だ」と言ったというのです。例えばどんな本があったの？と聞くと、交通ルールとか、はみがきだとか。だから面白くないのですよね、読んであげると言っても面白くない。そんな園もあったと言っていました。だから、保育の場もいろいろですし、行かれる皆さんもいろいろだと思います。

＜選書について＞

そこで、選書の問題について先ほども申し上げましたけれども、どっちの場にも言えることだと思いますけれども、できるだけ質の良い本を選ぶということを苦心しながら私たちはしているのですが、保育者の場合は幼稚園でも保育園でも話し合う仲間がいるのですね。「あなたそんな本買ってきてよくないじゃない」なんてことも言われることもありますし、「これ買おうか」、「いいね」と言ったりしています。

ボランティアの方たちには、やっぱり仲間をつくってほしいと私は思います。善意でなさる行為であっても、出向いて読むということは公的な仕事なのですね。そこで読むということは公のことになる。すると、卒園児がぼやいたように、「あのおばちゃん来る日嫌い」と言われたら悲しいですね。せっかく出向いたのに。だったら、絵本にはどんな種類があるかなとか、１年生だったらこういう本がいいかなとか、こういう本が喜ばれたけど、そういう仲間にはどんな本があるのかな、よく聞いてくれた本はどんな本だったかなということを話し合える身近な友人とか、こういう会の方に相談するとか、図書館からアドバイスをもらうとかということがとても大事だと思うのですね。

自分一人の思いだけで決めないということが大事ですね。長年いい本を見てきて、いろいろな幅を広げている方が選ぶのと、思いつきだけで「やってみるか」といって選ばれるのとはやっぱり違うと思うのです。

そういう意味で、みなさんがなさっている

ことは尊いことなのだけれども、やっぱり子どもたちにしてみたらどういう本を読んでくれるかはとても大切なことであり、どういう方が来るかっていうこともそうですが、子どもたちに対する責任があるんだと思うのです。

読み方を失敗するとか、そういうことは経験の中でどんどん上手くなっていくし、自然に上達していくと思うのですけど、選書についてはやっぱり相談できる仲間がいるということは大事です。とりあえず家にある１冊持って行って読もうかとか、そういうことではなくて本のことを学ぶということを大事にしていただきたいなという意味で、いつも一人で選んでいますかというふうに書きました。

＜実際の読み方は＞

実際の読み方については、難しいことは何もないので皆さんがなさっていることで、そんなにはずれていることはないと思います。ただ、いくつか心掛けていることはあります。例えば、ゆっくり読むことです。絵を見せる時間を保障するという意味でもゆっくり読んであげます。効果の問題はありますよ。ここは早めくりしたほうが面白いとか、そういうことはありますけど、私は自分の話し言葉より少しゆっくり落として読むということを心がけています。

それから、科学絵本なのか物語絵本なのかジャンルによって読み方が違います。物語だったら物語を届けることに目的があるわけだから、あちこちにいかないで最後まで読むことを狙いにすると、途中で質問されても、「あとでね」って言って先に進めるとかします。科学絵本の場合は、ちょっと端折って答えてあげたり、みんなで一緒に考えたり、「聞きたいことあったら、あとで聞くからね。考えておいて」と言って読むとかしています。

それと、もしもまだ慣れていない方がいらっしゃるとしたら、読みに行くときは言葉をこなしてから行くことです。もう絶対に黙読のまま行かないこと。黙読は大人がお話を知る上で簡単にできますね。でも、言葉というのは不思議なもので声に出してみると、全然違うのです。言葉に出してみると所要時間も分かります。それから、セリフと地の文の違いも分かります。どこが山場かも分かります。主人公の気持ちの表れも、こうやって読むほうが自然だなというのが分かるのですね。そういう意味で、音読を大事にするということをしたいと思っています。

読み慣れてくると、すごく脚色をなさる方がいます。保育園のある男性保育者が泣かすのが得意な人でした。「俺、今日一人泣かした」とか言うのですけど、それが目的じゃなくて、その本を読むことが目的なわけですから、ものすごい怖い声を出したりとかしたりしなくても、普通に読めばいいと思うのです。のっぺらぼうというか、よく淡々と読めって言われますけど、淡々と読めというのは棒読みということではなくて、表現、表情という

か、その物語の表情は大事にしながら、でも劇的過ぎないというのでしょうか。難しいことですけれども、自然のうちにやったらいいと思います。

私たちも、ときどきやります。『じごくのそうべえ』なんか読んでいるうちに、私が劇中の人になっちゃったみたいで、すごくなると子どもが私の顔を見るのですね。そうしますと、ああ、いきすぎたとわかるわけですね。そういう時って、必ず人の顔を見ます。怖いとか変だというときは。あ、絵本のほうに落とさなきゃと思ってしまいます。だから、子どもたちが絵本の方を注視している限りは、ノーマルな表現なのではないかなと思っています。

小学生にも絵本を！昔話を！

そこで、小学生にも絵本をということで少し広げてみたのですけれども、ごくごく一部ですが、童話も含めてあげてみました。それから本当は昔話集がたくさん出版されていますので、日本の昔話も含めてなのですけれども、絵本ばかりではなくて話を語る。語ることができなかったら読んでやるという意味で、日本の昔話や外国の昔話を紹介してあります。昔話は，もう高学年でも中学校でも聞いてくれますね。ロシアの昔話、アイルランドの昔話、日本の昔話の中で、しっかりした 15 分くらいのものもたくさんあります。そういうものも入れながら絵本も一緒に読んであげるとよいと思います。高学年でも十分楽しめる本がたくさんあると思いますので。

１、２年生からのものも含めて、最初の５冊が昔話なのですけれども、『かにむかし』。これ見ていただきました。それから、一つだけないのが『金のがちょうのほん』。これはイギリスの昔話集ですけど、『三びきのこぶた』なんかも入っています。挿し絵本でちょっと絵本ではないのですけれども、こういうものも含めて昔話がたくさん入っています。昔話は本当に年齢を選ばずいいなと思います。

それから、次のグループが言葉遊びの本ですけれども、さっきは『もこ　もこもこ』を見ていただきましたが『もけら　もけら』ですね。これも年齢を選ばず本当に面白いです。ジャズ調で読んだら楽しい本ですね。谷川俊太郎さんの『ことばあそびうた』は続編も出ています。それから、『なぞなぞのすきな女の子』です。これは本当に熊と女の子のやりとりが楽しくて、小学生でも楽しい本なのですけど、挿し絵もかわいらしくて面白いですね。

その次は、科学絵本です。『はじめてであうすうがくの絵本』、年長から低学年なんか本当に好きですね。「なかまはずれ」とか「じゅんばん」とか「せいくらべ」とか「たかさ」とか、いろいろしっかりものを考えて、絵の中の不思議を見付けて、これが仲間はずれを探します。理由はどうしてかというと？と、

聞くと子どもたちが考えるのですね。

もう年長組から大好きでしたね。本当に今、頭の中に何を考えているかがよく分かって面白かったです。「この中で、どれか一つ仲間はずれだよ、考えてごらん。理由を言ってごらん」。そうすると幼い子はたいてい、「はしごついてるからこれ」とか。それからスポーツカーは「２と書いてあるから、字を書いてあるのはこれだけ」とか、それから「やっぱりこれだと思うな、タイヤいっぱいあるから」とか。ある子は、「バスバス。お客乗せるのこれだけだから、これだよ」と言います。すると、パッと自転車に目を止めた子がいて、あ、分かったのかな？と思って「理由は？」「こがないと倒れる。あとのは倒れない」という。ああ、そうかと思っていると、もう一人の子は、「自動車はこっちだ。乗用車」。「なんで？」「向きが違う。一つだけこっち向いている」というのですね。とにかくみんなで探すのが楽しいのです。

面白くて、本当に子どもって 20 人いると 20 通りのいろいろな答えが返ってきて、動物と鳥の仲間とか水の中のものと、そうではないもの。果物の仲間とか、これはどれかというとき、もう「しましまがあるからこれ」。それからレモン。「これだけ酸っぱくてまずい」。それからさくらんぼ。「２個書いてあるから」と。すると子どもは「そうじゃないよ、さくらんぼだけど２個じゃなくて、こいつだけ皮ごと食える」とか言う。面白いね。「これだよ柿。これ葉っぱ付いている」とか言いますね。最高傑作だったのは、「やっぱりすいかだと思うな」と。「どうして？」「一人で食いきれないよ」。もう笑って笑って、面白かった。

これ、そういうふうに子どもたちが読んでいますよ。今、子どもたちの頭の中にはこれだけ考える力があるんですね。人の言葉を聞きながら自分はこう思うというのが出ているのですよという話を父母の会でしたんですね。お母さんたちもやってみて、「さあ、これの中で何が仲間はずれか」って。お母さんたちはじっと考えて、「分かった」と言った方がいました。「びわとさくらんぼ。高価でお使い物よ」。値段のことを言ったのはその方だけだったのですけど、でも人によって季節のことを考える人とか、あと皮を剥くか剥かないかとか、産地のこととか、本当にいろいろなことを言う方がいて、とても面白かったんですね。

もう時間ですからやめます。あと、科学絵本、それから次はお話の本ですけど、遊びが豊かに展開する本ですね。『ひとまねこざる』。『キャベツくん』。それからその次は、ハッと思える人物が出てくるとか、テーマ性を持っているとか、そういうことで皆さんぜひ読んでみてください。『にぐるまひいて』は、アメリカの開拓時代の頃、『ちいさいおうち』の頃が舞台になって、ものはどうやってできていくのか、暮らしはどうやって成り立つかですね。『ペレのあたらしいふく』もそうです。『黒ねこのおきゃくさま』は、やっぱりしみじみと子どもたちの中にテーマが染み込んでくる。６年生が聞けば６年生なりに。

『黒ねこのおきゃくさま』なんかは日本の「かさじぞう」と同じですね。冬寒いとき読むのですけど、お腹を空かせた黒猫に物が無くても何でも与えるおじいさんの話なのですけど、本当にいい話で、聞く年齢によってよく分かるお話です。『雪わたり』ですが、賢治作品の絵本化は難しいと思うのですけど、これも言葉を聞かせるという意味で、小学生はとても喜びました。『くしゃみくしゃみ天のめぐみ』ですが、これはうまい日本語だなと思います。高学年にも向きます。「梅の木村のおならじいさん」とか、「とめきちのとまらぬしゃっくり」とか、１話ずつになっている昔話の形を借りた創作のお話です。

そんなものがありますので、どうぞ皆さん、失敗をしながら選書を楽しんでください。どこにいても誰の子どもにでも楽しい物語を届けてくださると嬉しいなと思います。

子どもは誰から読んでもらったっていいのです。先生であっても、よそのおじちゃんやおばちゃんであってもいい。だけど、できる限りはいい本と出会ってほしいと思っています。

長い時間、お付き合いいただいてありがとうございました。　（講演終）-拍手-

閉会のあいさつ

「まつぼっくりの会」代表　児玉　イツ子

中村先生、２時間たっぷりのお話ありがとうございました。ああまた聞きたい、こんな気持ちですね。皆さんの心の中はどんなふうにして動いているか、ここは聞きません。そっと宝物のようにして持ち帰っていただけたら嬉しいなと思います。

この会は私たち「ゆめのたね」さんと「まつぼっくりの会」とで主催できて大変嬉しかったのですけれども、その背景には日頃から西川図書館で活動させてもらっておりまして、その中で松原館長さんはじめ職員のスタッフの方が、私たちにたくさんの指導をしてくださっております。それで、どうしても最後に館長さんより一言お礼の言葉をいただきまして、今日の会を終わらせてもらいたいと思います。館長さん、お願いいたします。

西川図書館館長のあいさつ

皆さん、こんにちは。西川図書館の館長をしております松原と申します。

本日は、このように大勢の方から西川に来ていただきまして、本当にありがとうございます。この会は主催が「ゆめのたね」さん、そして「まつぼっくりの会」さんです。実は図書館と共催しますと公の施設を無料で借りることができますので図書館が共催になってい

るに過ぎないわけです。

また今、児玉さんが図書館からご指導などという話がちょっと出たのですけれども、あまり指導ということはしておりません。なるべく皆さんが自由に活動していただきたいなと思っているのですけれども、たまに苦言を呈することがありまして、それが指導的な話だということになるのかもしれませんけれども、図書館ではボランティアの方たちと仲良く末永く楽しくやっていきたいと思っております。

「ゆめのたね」さんは毎週日曜日の２時から２時半まで、「まつぼっくりの会」さんは毎週土曜日の同じく２時から２時半まで、ボランティアの方たちが交替で西川図書館で子どもたちに読み聞かせをしております。年間何百人という方たち、親子で聞きに来ていただいております。これらは全て「ゆめのたね」さんと「まつぼっくりの会」さんの活動のお陰だと思っております。本当にありがとうございます。

今日は、中村柾子さんの講演会ということで、非常に楽しみにしておりました。最初に児玉さんがぜひ、西川に中村柾子さんをお呼びしたいということで発案をされ、その熱意を社会福祉協議会さんに伝えたところ、いろいろな調整を含め承認をしていただきました。感謝申し上げます。

本日は、中村先生のお話をお聞きしましたが、大変、分かりやすい内容で、それから具体的な子どもの反応なども私どもにお話をしていただきました。ありがとうございました。私どもも読み聞かせのあとは、本当は子どもたちにどうだったか聞きたい気持ちが一杯なのですが、聞かないという約束でやっております。そういったところを今まで分からなかった点が何か少し分かったような気がいたしております。今日のお話を胸に、また子どもたちと絵本を楽しみたいと思います。本日は本当にありがとうございました。また、これからもいろいろとご指導のほど、お願いします。

会場の皆様、本日は、どうもありがとうございました。先生にもう一度暖かい拍手を皆さんでお願いします。（拍手）

（児玉代表）

中村先生、ありがとうございました。また、いつかお会いできる日を楽しみにしながら、先生が退場されますので、もう一度盛大な拍手をお願いします。

今回、70 名の募集だったのですけれども、参加者が 140 名ほどになりました。大変嬉しく思っております。これで講演会終了いたしますが、帰る道中はどうぞ気を付けてお帰りくださいませ。まだ先生のお話の余韻が残っていらっしゃるかと思いますが、車などにお気を付けて無事お帰り願います。皆様どうもありがとうございました。（終わり）

＜懇談会＞

中村先生を囲む懇談会の様子

講演会終了後に、中村先生のご厚意で西川図書館読み聞かせボランティアグループ「ゆめのたね」、「まつぼっくりの会」との懇談会をさせていただきました。日ごろの疑問を中村先生に質問したり、会員同士の意見交換もして、とても素敵な時間を過ごすことができました。

懇談会で出た意見や感想など

○とてもよいお話を聞くことができてよかった。中村先生ありがとうございました。

○子どもはまだいませんが、将来の子どもに絵本好きになってもらいたいと思っている。今日の話で、年齢により絵本の選び方がいろいろあることがわかった。

○選書が難しい。失敗ばかりしている。子どもの心に残る絵本が読みたいと思っている。自分の孫に読み聞かせをしている。お勧めの絵本を寝るときに読んでやっている。単調な話がよく寝るようだ。やはり子どもというのは母親といるのが楽しいみたいだ。

○私が子どもの頃は母親が寝床で昔話を聞かせてくれたものだが、いつも話の中に出てくる悪者は自分のことだった。子どもの頃は絵本なんてなかった。

○40 年保育士をしてきた。日々仕事に追われていて、定年になってから読み聞かせの仲間に入り絵本を読んだり昔話を語ったりしている。日々新しい発見がある。選書について、やっと少しわかってきた気がする。今日の先生の話を聞いていて、お昼寝の時「替えてきていい」と言う子どもの話を聞き、あっいるいると思いました。

○下の子が東京の大学にいる。西川図書館の読み聞かせボランティア養成講座を受けて、いろんな勉強会にも出ている。絵本の大切さ、奥の深さを感じる。絵本は心があったかくなる、できればタイムマシンに乗って自分の子育てをもう一度やり直してみたいと思った。孫はまだだができた暁には絵本を読んであげたい。

○西川図書館の読み聞かせをしているときに子どもの目がキラキラ輝いているのを見ると、その時は本当に至福のとき。図書館の講座では基本的なこと、絵本とは何かを聞いた。またその次は実践的な講座もしてもらっている。そういう機会に恵まれてよかったと思っている。

○講演を聞いて 40 年間現場で何をしていたのかと思った。自分らしく読むことが大切、子どもにとって楽しくない絵本はだめとわかった。絵本には力があることが分かった。

○講演会はとっても楽しい 2 時間だった。本を読んだ後の子どもの反応を教えてもらってよかった。

○子育てのこと勉強になった。耳から入ることの大切さが分かった。グリム童話はけっこう怖い内容のものがある。正統的なお話を伝えるのが大切とのこと。とっても良くわかった。いま、子どものためでもあるが自分のためにも絵本を読んでいる。

○耳から聞く物語の力は大きい。子どもの自立を描いた『こすずめのぼうけん』を聞いて育った子どもが大きくなって、その本を見たらぱっと思い出してくれた。小風 さちが昔の絵本の表紙をみたとき、ぱっと言葉が浮かんできたという。読んでもらった時はまだ文字が読めなかったのに。聞くってすごいこと。学校の授業は聞けなかったら覚えられない。聞くことは大切。小さいときから体験してわかっていくもの。（先生）

○人物を分けてドラマティックに読みたいと思うときがある。図書館も先生も自然体で読めという。この辺どうか。

○瀬田貞二さんは、絵本や昔話を読む場合、人物の使い分けが絶妙。ふつうに読んでいてもきちんと分かる。間の取り方もうまい。小河内芳子さんは肩の力が抜けている。話が疲れない。上手な人でも聞いて疲れる場合がある。小沢昭一さんは力が抜けていておもしろい。絶妙な語りと間がある。読み聞かせはやっている回数や人柄が自然に出てくるもの。棒読みはつまらない。松岡享子さんも自然で疲れない。読み聞かせは声優の朗読などとは違うもの。子どもの目をみていると話に引き込まれているかどうかがわかる。小河内芳子さんのストリーテリングは間違えても聞いている人が分からないくらい自然。ふつうの人ならそんなことは無理、できない。（先生）

○絵本から童話に移行するときは、例えばうちにいる孫の場合ならどのように見極めるのか。

○聞いて面白かったと思うようなときに読むとよい。（先生）

○特別支援の学校に勤めている。絵本を毎日読んだ。1 年後作文を書いたり、自分の気持ちを言えるようになった。一杯本を読んであげたからかと思っている。自閉症の子も絵本で変わってくる感じがする。

○長男は『ぐりとぐら』がナンバーワンだった。ベスト 25 まで挙げてくれた。大人になって心に残る絵本があってほしいと思う。読み聞かせのボランティアもしているが、夜寝る前に寝床で子どもに本を読んであげるのが楽しくて幸せ。何歳まで続くかと思ってやっている。

○子どもからぐりとぐら、どっちが頭いいと思うと聞かれた。質問する方と答える方がいたら、答えを言う方が頭がよいのだと子どもから教えられた。で、よく見るとぐらの方が答えているんですね。（先生）

○読み聞かせをしていて、子どもたちとのそういうやり取りをもっとしたいなと思っている。図書館や学校とかだと初対面のことが多くてなかなかできない。残念。

○家で『三びきのやぎのがらがらどん』の練習をしていたら、20 ウン歳の娘が、それみたことがあると言ってくれた。

○今日の講演を聞いてやっとスタートラインに立った気がする。研修を受けて、プログラムの本を図書館の人に見てもらっていたが、何を選んだらいいのか悩んでいた。児玉さんに聞いて、よいという本を全部読んでみた。その中から選んでやった。ほかの皆さんは年齢と子どもの発達を考えていい本を選んでいる。先生の書いた本も読んだ。子どもへの目線が全然違った。先生が子どもの目線に立って子どもの心に寄り添っていると思った。私は一体何だったのかと思った。子どもに合う本と今受け入れられる本と、そうでない本があると。研修会に出てお勧めできない本もあることが分かった。でも、お勧めできない理由が、考えても分からなかった。読んでみてなぜ悪いのか 1 年くらいずっと考えてきた。勧められない本は読む人によって違う。いまは新しい本が毎年たくさん出てくるのに、なぜ古典なのか。最近ぼんやりと分かってきたのであるが、今日はっきりと分かった。

○今日の先生のお話は、心に灯をともしてくれた。

○西川のボランティアグループは、包容力があっていい。それはリーダーがいいからだと思う。若い人が自由に言える雰囲気があっていい。先生のお話は、声の響きにぬくもりが感じられ、子どもへの愛情が感じられた。話に引き込まれた。聞いていた人たちも幸せそうだった。

○皆さん、お互いに遠慮なく言える中というのは、人間関係が良いということですね。とても素晴らしいことだと思います。（先生）

（終わり）

講演会レジュメ

絵本はともだち　～子どもと読み合う絵本の楽しさ～

2012.3.10　中村　柾子
主催「ゆめのたね」「まつぼっくりの会」

☆ 現代は、子どもが子どもらしく過ごしにくい時代
　せわしなく忙しい子ども　変わってしまった遊び
　絵本を読み合うひとときは、大人と子どものやさしい関係を取り戻せるとき
　(叱っていては読めないし、義務感でも読めません。人と人との関係を生むという意味では，他のメディアとも違います　)

☆ なぜ、読むことがいいのでしょう
いい絵本や童話は、子どもの気持ちに添いながら、ものの見方を広げたり，よろこびを生んだり、成長を支えてくれます。子どもばかりでなく大人にもたらすものもなんて大きいでしょう。物語そのものの面白さもさることながら読み合うこと自体が幸せなのだと思います。

☆ 絵本を読むことで、子どもたちが得るたくさんの宝物
① 言葉の力・言葉の魅力
② 絵を読む楽しさ
③ 自然を楽しみ見つめることや、身の回りのものへの関心のたかまり
④ 童話につながる物語の面白さ
⑤ 大人と子どものつながりの深さ・確かさ

☆ 子どもたちが楽しんで読んでいる絵本のいくつか
　赤ちゃんなら～
　ちょっと大きくなった子どもたちの興味
　鍛えられていく目や言葉　　喜ぶことがいいとは限らない子どもの本

☆ 絵本（童話）を選ぶために、私たちにできることは？
・子どもの成長と絵本の関係は密なもの
・まず、絵本の種類を知る
　図鑑　科学絵本　知識の本　実用書　言葉遊びの本　写真集　物語（内外の昔話、創作絵本）など、なんてたくさんあることでしょう。どれも子どもたちにはおもしろい世界です。
・季節感や行事、子どもが興味を持っていること、などと結び付けて
・それにしても質を考えて選ぶことは、なんて難しいのでしょう
　アンデルセンやグリムの名を知らない人はいないでしょう。日本の代表的な昔話の名前も。でも、どんなお話しかとなるとよくわからない、ということもあるでしょう。そんなときは、図書館でもとのお話にあたってみましょう。選ぶ目を鍛えていくことが、大人自身のためにも大事だと思います。
　古典と新作について…長い間子どもたちに読み継がれてきた絵本には、支持されてきた理由があります。
　ロングセラーの確かさ・魅力を知れば、新しく出た本を見る目も鍛えられるのでは？

＊　大人も好奇心を発揮して見ると～
大人になると、自由にいろいろな絵本を選べそうなのに、好みの世界が意外に狭い、ということはありませんか。子どもたちは、いろいろな楽しみを持っています。好きな作家や，気に入った絵は大事にしつつも、子どものためには、自分自身の枠を広げる努力を。
子どもたちは、キャラクター絵本や仕掛け絵本が好きです、なぜでしょう。絵本は物語を楽しむものと捉えるか、子どもを喜ばすためのおもちゃと捉えるか、理由を考えてみたいですね。

ボランティアと子どもの読書

〈保育者や、教師が日々の暮らしの中で絵本を読んだり，童話を読むということ〉

・子どもの遊びや興味などを把握している。子どもたちの日々の変化をつかめるなど、絆の深さはあるはず。
・選書の失敗があっても、いくらでも取り返すことができるという安心感がある。
・選書の幅を、子どもの好みによって選ぶことができる。
・気に入った絵本は，何度でも読むことができる、などの特徴、利点などがある。

反面、ボランティアの方は、失敗しないようにと、選書に大きな冒険ができないことや、絵本の大きさに気を使ったり、童話などは時間の制約もあるでしょう。
保護者同様、ボランティアの方の本に対する考えや、子ども理解なども、個人によって大きな幅があるのが、現状だと思います。

〈でも，保育の場もいろいろです〉

・本がいつも身近にあり、読んでくれる大人がいるところもあれば、あまり絵本など無いところもある。
・選書の問題（しつけの本や、キャラクターものなどをおいているところも～）
･聞きなれた耳を持っている子どもたちと、あまり読書体験が無い園と、園によってさまざま。

〈選書について〉

いつも一人でえらんでいますか？　どんな本がいいか、話し合える仲間がいますか？
選ぶ本に偏りがあると思ったら，自分自身の本に対する考えを広げる努力をしましょう。

〈実際の読み方は〉

あまり約束事は作らないほうがよいと思うが、たとえば～
・言葉の問題（お話を聞く子どもの年齢と、物語の関係。赤ちゃんや、2，3 歳の子どもに読む場合と幼児、小学生では当然違ってくる）
・途中で質問されたら？
・まずは本番前に、音読を。
・内容をわかりやすく伝えるということは、自然に身につけていると思う
　細かい絵など、指し示したりしてやるとか
　物語絵本と科学絵本は、とくに区別して考えないが，種類によっては遊んだり、質問に答えたり、子どもの話を聞いてやったり、本にとらわれずに楽しむこともある。

小学生にも絵本を！昔話を！ ほんの一例ですが～

『かにむかし』木下順二文　清水昆絵　岩波書店
『じごくのそうべえ』田島征彦作　童心社
『金のがちょうのほん』レズリー・ブルック文・絵　瀬田貞二、松瀬七織訳　福音館
『やまんばのにしき』松谷みよ子文　瀬川康男絵　ポプラ社
『日本の昔話』１～５巻『ロシアの昔話』など　福音館書店

『もけら　もけら』山下洋輔文　元永定正絵　中辻悦子構成　福音館書店
『ことばあそびうた』谷川俊太郎詩　瀬川康男絵　福音館書店
『なぞなぞのすきな女の子』松岡享子作　大社玲子絵　学研

『おっぱいのひみつ』柳生弦一郎作　福音館書店
『はじめてであうすうがくの絵本』安野光雅作　福音館書店

『ひとまねこざる』Ｈ・Ａレイ文・絵　光吉夏弥訳　岩波書店
『キャベツくん』長新太文・絵　文研出版
『ねえ、どれがいい？』ジョン・バーニンガム作　まつかわゆみこ訳　評論社

『おばけリンゴ』ヤーノシュ作　矢川澄子訳　福音館書店
『きょうはなんのひ？』瀬田貞二作　林明子絵　福音館書店
『にぐるまひいて』ドナルド・ホール文　バーバラ・クーニー絵　もきかずこ訳　ぽるぷ出版
『ちいさいおうち』バージニア・リー・バートン作　石井桃子訳　岩波書店
『スーホの白い馬』大塚勇三再話　赤羽末吉絵　福音館書店
『ペレのあたらしいふく』エルサ・ベスコフ作・絵　おのでらゆりこ訳　福音館書店
『おおきくなりすぎたくま』リンド・ワード文・画　渡辺茂男訳　ほるぷ出版
『ひろしまのピカ』丸木俊文・絵　小峰書店

『黒ねこのおきゃくさま』ルース・エインスワース作　荒このみ訳　山内ふじ江絵　福音館書店
『くまの子ウーフ』神沢利子作　井上洋介絵　ポプラ社
『雪わたり』宮沢賢治作　堀内誠一絵　福音館書店
『ふたりはともだち』アーノルド・ローベル作　三木卓訳　文化出版社
『くしゃみくしゃみ天のめぐみ』松岡享子作　寺島龍一絵　福音館書店

昔話は、物語の宝庫です。子どもたちに沢山語ってやりましょう。絵本から物語への移行も聞くことが前提にあってこそ、です。本は面白い！と思えるようになるには，まずは楽しい絵本と出会うことが大事です。テーマ性の強い作品は、テーマ云々だけでなく、どう描かれているかを吟味したいですね。

中村柾子先生が講座のために用意された絵本のリスト

『じゃぐちをあけると』　しんぐうすすむさく　福音館書店

『にゃんきっちゃん』　岩合日出子ぶん　岩合光昭しゃしん　福音館書店

『ことばあそびうた』　谷川俊太郎詩　瀬川康男絵　福音館書店

『どうぶつはいくあそび』　きしだえりこ作　かたやまけん絵　のら書店

『どうぶつはやくちあいうえお』　きしだえりこ作　かたやまけん絵　のら書店

『もこ　もこもこ』　谷川俊太郎作　元永定正絵　文研出版

『おなかのすくさんぽ』　かたやまけん作　福音館書店

『おおかみと七ひきのこやぎ』　フェリクス・ホフマンえ　せたていじやく　福音館書店

『ちいさいおうち』　バージニア・リー・バートンぶん・え　いしいももこやく　岩波書店

『ほね』　堀内誠一さく　福音館書店

『くだもの』　平山和子さく　福音館書店

『おつきさまこんばんは』　林明子さく　福音館書店

『ソリちゃんのチュソク』　イ・オクベ絵・文　みせけい訳　セーラー出版

『わたしのワンピース』　にしまきかやこえ・ぶん　こぐま社

『おじさんのかさ』　佐野洋子作・絵　講談社

『みんなおなじ　でも　みんなちがう』　奥井一満文　得能通弘写真　福音館書店

『ロバのシルベスターとまほうのこいし』　ウィリアム・スタイグ作　せたていじやく　評論社

『ももたろう』　松居直文　赤羽末吉画　福音館書店

『ももたろう』　松谷みよ子著　瀬川康男画　フレーベル館

『ももたろう』松谷みよ子作　和歌山静子絵　童心社

『けんたうさぎ』中川李枝子さく　山脇百合子え　のら書店

『あおい目のこねこ』エゴン・マチーセンさく・え　せたていじやく　福音館書店

『100 まんびきのねこ』ワンダ・ガアグぶん・え　いしいももこやく　福音館書店

中村柾子さん講演会

絵本はともだち

講師　中村（なかむら）　柾子（まさこ）さん（青山学院女子短期大学講師）

講師プロフィール

東京生まれ，青山学院女子短期大学児童教育科卒業。十年間にわたって幼稚園に勤務後，保育士として保育園で勤務。元・私立豊川保育園園長。
現在，青山学院女子短期大学講師，立教女学院短期大学非常勤講師
著書に『絵本はともだち』『絵本の本』（福音館書店）他 多数

日　時　平成 24 年３月 10 日（土）
午後１時 30 分～３時３０分
（午後１時から開場します）

会　場　新潟市西川健康センター
（〒959-0423　新潟市西蒲区旗屋 701 番地 2）

対　象　読み聞かせボランティア，
子どもの読書に興味のある方，一般の市民

定　員　７０名【締め切り　３月３日（土）】　参加無料

問合せ・申込み　西川図書館へ
〒959-0422　新潟市西蒲区曽根 2046
電話 0256-88-0001
FAX　0256-88-2458

主催　「ゆめのたね」（絵本読み聞かせボランティアグループ）
「まつぼっくりの会」（絵本読み聞かせボランティアグループ）
共催　西蒲区社会福祉協議会，西蒲区ボランティアセンター
新潟市教育委員会（新潟市立西川図書館）

き　り　と　り　線

西川図書館　行き

中村柾子さん講演会「絵本はともだち」に申込みます。

氏名（ﾌﾘｶﾞﾅ）	電話番号	グループ名

※　記載された個人情報は，当講演会の業務以外には利用しません。

2009.3.31

西蒲区の図書館が目指す５つの指針

新潟市立西川図書館協議会

前　文

私たち西蒲区民は、各地区の文化の拠点として長年の夢だった公立図書館を作りました。

私たちは、この図書館に大きな期待や想いを抱いており、地区民一人ひとりが、**心豊かに生きられるサポート役として十二分にその役割を果たし、地域に根ざした楽しく愛される図書館**にしたいと願っています。

そこで、それぞれの図書館が**誰にも自由に利用でき、使いやすく親しみやすい図書館**として機能するために、西川図書館協議会と図書館職員は区民の意見・要望をくみ取り、実行を目指す**「西蒲区の図書館が目指す５つの指針」**を策定しました。

（なお、この指針は必要に応じて見直しをするものとします。）

１　生涯学習や区民の生活に役立つ情報を備え、発信する図書館

①どんな資料も得られるように、他の図書館との連携を強化する。

②癒しや生き甲斐・やすらぎを得られる資料の収集と紹介の工夫に努める。

③図書館の意義を含め利用の仕方について、ＰＲの工夫に努める。

２　幼児・生徒、障がいのある方、お年寄りに利用しやすいバリアフリーの図書館

①諸学校・幼・保育園等の図書館を支援する。

②区内図書館、児童館、公民館が相互に有機的な連携を図り、区民の利用拡大を図る。

③幼児・生徒の読書力向上を支援する。

④ブックバスの設置、もしくはその機能を果たす方策を考え、サービス網充実に努める。

⑤施設のバリアフリーに努めるとともに，住民同士のふれあいによる心のバリアフリーも推進する。

３ 地域文化を伝承し、創造する図書館

①内図書館・図書室に特色を持たせるために、郷土資料収集と整理に努める。

②計画的・継続的な地域文化の紹介イベントの実施、情報発信に努める。

③地域の古い資料を発掘し寄贈を呼びかけるとともに，地域のお年よりの人たちが引き継いできた伝承やかくれた地域の宝を次世代へ伝達する。

４　市民が参画し行政と市民が協働し支えあう図書館

①司書の資格を持った職員を配置する。

②図書館を育てる区民ボランティアの仕組みを整え、育成する。

③職員・ボランティア・利用者のための計画的・継続的な研修を実施する。

④利用者に、笑顔で優しく親切な応対に心掛ける。

⑤利用者・区民の意見・要望に応える。

５　誰もがゆっくりとくつろげる滞在型図書館

①区民がコミュニケーションや融和を図るために図書館家具の配置や改善を図る。

②ＤＶＤ・ＣＤ等の資料数や視聴ブースを拡充する。

③区民のコミュニケーションの場や交流を深め合う事業に取り組みその充実を図る。

④施設設備を改良し、利用しやすい図書館にするための環境を整える。

※平成 19 年 4 月に新潟市が政令市となり，西蒲区が誕生しました。西川図書館が西蒲区の中心図書館となり区に図書館協議会もおかれることになりました。上記の 5 つの指針は西川図書館協議会の 2 年間の任期のなかで西蒲区の図書館をどんな図書館にしたいかを委員みんなで考えてまとめたものです。

◆あとがき◆

西川図書館は，新潟市の 8 つの行政区の一つ西蒲区の中心図書館で，同区の岩室，潟東，巻の 3 図書館の調整機能を担っています。西川図書館は平成 17 年 3 月の市町村合併で新潟市の図書館となりましたが，合併の少し前から建設計画が進められ合併直後の平成 17 年 7 月 23 日に開館したという，まだ新しい図書館です。西蒲区というのは，西川町，岩室村，潟東村，中之口村，巻町の旧 5 町村がまとまり区に移行したところです。新潟市で一番広く(市の約 4 分の 1 の面積)，田園風景の広がる緑豊かな区です。区内には開湯が江戸時代という岩室温泉（来年開湯 300 年）があり，また区の西側に佐渡弥彦米山国定公園の弥彦山（弥彦村）に連なる多宝山，角田山がそびえており，その山頂からは雄大な日本海と佐渡ヶ島が眺望できるということで観光にも力を入れている区です。

新潟市の図書館の特徴となっていることの一つは，図書館協議会が 5 つあることです。中央図書館（定数 15 人）と 4 中心館に図書館協議会（定数 10 人）があり，それぞれ年 2 回の定例会議のほか年 1 回の合同意見交換会兼研修会を実施しています。各協議会では，それぞれの地域の実情を背景に図書館運営やサービス内容について館長の諮問に答えるとともに委員それぞれが意見を述べるということをしております。図書館が市民にとって身近で使いやすい施設となるために，幅広いたくさんの市民の声を協議会に反映させる新潟市の方式は，意義があることだと考えています。

図書館協議会は図書館と市民にとってはフォーマルな場であると言えますが，図書館とボランティアが協働する場面は，もっと柔軟で多様性に富んでいると思います。図書館が企画し市民とともに実施する事業があったり，逆に市民が持ち込む企画を図書館が音頭をとって実行したりする場合もあります。さらに図書館が市民活動の発表の場となったり，市民のコミュニティづくりの機会になったりすることもあります。図書館が個人の様々な学習活動を支援し，またグループの文化活動や社会活動を支援する，あるいは一緒に活動することは地域の多様な発展を考えていく上で大事な役割であると考えます。図書館は単に資料や情報提供をするだけにとどまらず市民と共に活動することで図書館の可能性がより広がっていくのではないかと感じています。

本事業で初めて西川図書館が西蒲区社会福祉協議会と西蒲区ボランティアセンターと共催させていただきましたが，地域の中で連携することでお互いの専門領域の強みを改めて認識することができました。一つの団体や機関では難しいことでも連携することで地域課題に取り組むことができたということは大変有意義な収穫ではなかったかと思いました。今後もこのような形で地域社会に貢献できればいいなと期待しているところです。

今回の中村柾子さんの講演会も，「まつぼっくりの会」代表の児玉イツ子さんのアイデアと熱意で始まり，「ゆめのたね」代表の高木章さんの行動力とリーダーシップで実現したものです。図書館は二人の代表の後ろからついていき，ところどころアドバイスをしただけではありましたが，終わってみるとみんなが達成感と満足感を味わうことができました。図書館としても二つのボランティアグループのみなさんのおかげで，とてもよい仕事をさせてもらった，心に残る事業であったなと思っています。二つのグループの皆様に感謝申し上げます。これからも皆さんの読み聞かせ活動が発展し，みなさんの活動によって地域の子どもたちが豊かに育まれていってほしいと強く願っています。

ご講演いただきました中村柾子先生にも深く感謝申し上げます。大勢の人が中村先生のお話に熱心に耳を傾けて聞いていらっしゃいました。その時の内容を記録集にさせてもらう許可をいただきまして，大変うれしく思っています。先生の講演で，特に印象深かったのは『日本語が滅びるとき』(水村美苗/著)の中の一節「教育とは家庭環境が与えないものを与えることである。教育とは、さらには市場が与えないものを与えることである」でした。先生は保育に携わる立場として，保育園・幼稚園は家庭や親とは異なる役割・スタンスをもつ場であるということを皆さんに分かりやすくお話されました。また，教育の現場においてはマーケットでの人気や市場原理とは異なる理念で子どもたちに与えるものを吟味していることも話され，私たちもよくわかりました。図書館の立場としても，そのことはとても重要なことであると思いました。

図書館も社会教育施設として人々の自立や成長を支援する役割を担っていると思っています。図書館は人々が知識や情報を得ることのほか，書物を通して著者の思想に触れることにより，心を耕し人生を豊かにするという働きもあります。図書館の現場にいる立場からは，とても市場化や経済主義になじむものではないと思います。しかし現状は経費削減や人員削減などにより効率化・委託化を強く求められています。また全国に広がっている図書館の指定管理者制度も，より市場原理の導入を推進するものとなっています。そんな中で，この言葉をより多くの市民に考えていただきたいと思っているところです。

今回，中村先生が西川においでくださったことで，西川図書館の読み聞かせボランティアと図書館職員がとても元気になった気がいたします。中村先生の今後ますますのご活躍をボランティアと職員一同心から祈念いたしております。本当にありがとうございました。

2012.3.31　　新潟市立西川図書館　館長　松原　伸直

西川図書館共催事業　中村柾子さん講演会「絵本はともだち」　講演記録
平成 24 年 3 月 31 日　発行
新潟市立西川図書館　〒959-0422　新潟市西蒲区曽根 2046
電話 0256-88-0001　fax0256-88-2458　Eメール：nishikawa.cl@city.niigata.lg.jp